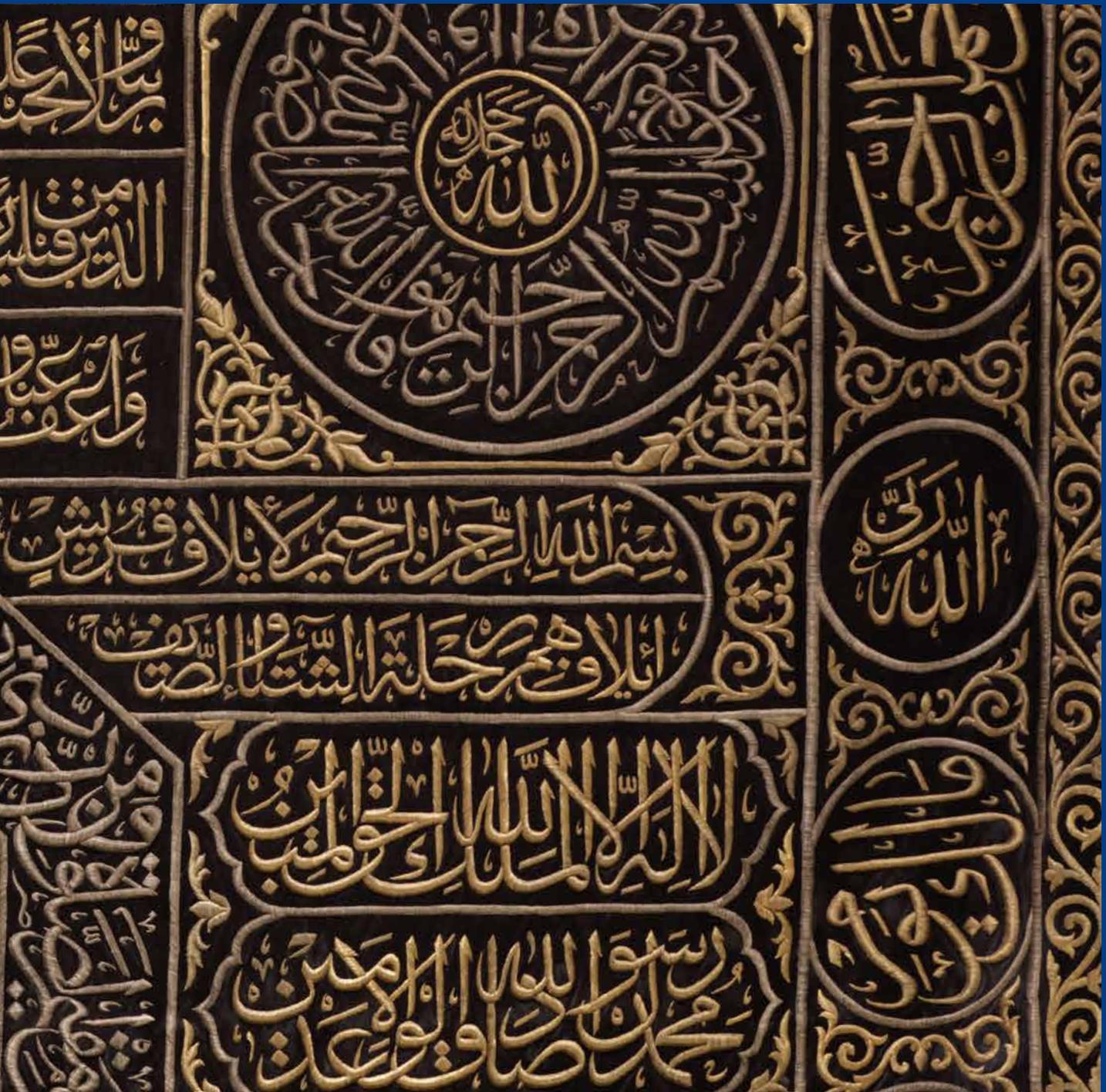


国立民族学博物館

要覧

2018





目次

ごあいさつ	1
設置目的と機能	2
沿革	3
歴代館長／組織	4
研究活動	10
学術資源研究開発センター	23
国際研究統括室	24
博物館の共同利用	26
共同利用型科学分析室	27
資料・情報の整備と社会還元	28
資料とデータベース	28
展示	32
国際協力・研修	39
博物館社会連携	40
広報・事業	42
人間文化研究機構	46
基幹研究プロジェクト	48
総合研究大学院大学	50
利用案内	52

ごあいさつ

国立民族学博物館(みんぱく)は、世界最大級の博物館機能と、大学院教育の機能を備えた、文化人類学・民族学の研究所として、世界で唯一の存在です。

人類の文明は、今、数百年来の大きな転換点を迎えているように思います。これまでの、中心とされてきた側が周縁と規定されてきた側を一方的にまなごし、支配するという力関係が変質し、従来、それぞれ中心、周縁とされてきた人間集団の間に、創造的なものも破壊的なものも含めて、双方向的な接触と交流・交錯が至る所で起こるようになってきています。それだけに、異なる文化を尊重しつつ、言語や文化の違いを超えてともに生きる世界の構築をめざす文化人類学の知が、これまでになく求められているように思われます。

みんぱくでは、こうした世界の変化を受けて、10年の年月を費やし、本館における世界諸地域の文化に関する常設展示の全面的な改修を進めてまいりました。その作業は、平成29年3月で一応の完了をみましたが、同年4月からは、研究部の体制も全面的に改め、時代の要請に応じた新たな組織で研究活動を推進することにいたしました。研究部は、「人類基礎理論研究部」「超域フィールド科学研究部」「人類文明誌研究部」「グローバル現象研究部」、そして「学術資源研究開発センター」から構成されます。いずれも、国内外の大学や研究機関、さらには研究や資料収集の直接の対象となった社会の人びと、すなわちソース・コミュニティの人びとと連携し、国際的なネットワークを通じた協働のもとで研究活動を展開していくことになります。

全面改修を終えた本館展示についても、すでに次の段階に向けた作業を進めています。次世代型電子ガイドと新世代ビデオテークとの連動、さらにはウェブ上に展開する「みんぱくバーチャルミュージアム」との連携により、みんぱくにこれまでに蓄積され、今も蓄積されている研究情報を、展示を糸口にして、利用者、研究者の皆さまそれぞれの関心に応じて自由に引き出し、さらなる探究につなげていくシステムを次年度に導入すべく、開発を進めています。

また、現在みんぱくでは、「フォーラム型情報ミュージアム」というプロジェクトを推進しています。このプロジェクトは、みんぱくの所蔵する標本資料や写真・動画などの映像音響資料の情報を、国内外の研究者や利用者ばかりでなく、それらの資料をもとと製作した地域の人びと、あるいはそれが写真なら、その写真が撮影された現地の人びとと共有し、そこから得られた知見を共にデータベースに加えて共有し、新しい共同研究や、共同の展示、コミュニティ活動の実現につなげていこうというものです。

これらの活動は、いずれも、かねてよりみんぱくがめざしてまいりました、さまざまな人びとの知的交流と発見、協働の場、つまり知のフォーラムを、研究教育活動・博物館活動を問わず、これまで以上に充実したかたちで実現しようとするものです。

皆さまの、ご協力、ご支援を、心からお願い申し上げます。



国立民族学博物館長

吉田 肇司



表紙
「キスワ」(西アジア)より

設置目的と機能

設置目的

本館は、文化人類学・民族学に関する調査・研究をおこなうとともに、民族資料の収集・整理・公開などの活動をすすめる、世界の諸民族の社会と文化に関する情報を人々に提供し、諸民族についての認識と理解を深めることを目的としています。なお、本館は、大学共同利用機関として、国立学校設置法の一部を改正する法律(昭和49年法律第81号)により設置され、平成16(2004)年4月に国立大学法人法(平成15年法律第112号)により大学共同利用機関法人・人間文化研究機構の一員として新たな出発をしました。

機能

研究所 本館は博物館機能をもった研究所です。文化人類学・民族学を核とし、その隣接諸分野の研究をおこない、我が国の文化人類学・民族学研究のセンターとしてその機能を十分に発揮すると同時に、研究の成果を出版その他さまざまな形で公開し、研究者コミュニティと一般市民への情報提供と研究広報をおこなっています。本館の研究者は、文化人類学・民族学や言語学、生態人類学、考古学、民族技術、民族芸術などを専門とするスタッフで構成されています。

共同利用 本館は大学共同利用機関として、研究者コミュニティに支えられた共同研究をおこなう開かれた研究所です。また、収集・保管する資料は研究のために広く利用されています。

情報センター 研究に基づき、諸民族の生活を知るための標本資料、諸民族の社会と文化に関する映像・音響資料、文献図書資料、HRAF(Human Relations Area Files)などの諸資料を収集し、幅広い研究のための基礎的な資料や情報の整備をおこなっています。これらに関する情報を、コンピュータを活用したデータベースの構築を通じて国内外の研究者へ提供しています。

展示公開 研究の成果を展示を通じて公開しています。本館の研究者は、展示についての企画や実施にも参加しており、研究と展示の緊密な連携を基本方針としています。本館展示は、世界の諸民族の文化と社会を大きく地域ごとに分けた地域展示と、音楽、言語などの人類文化に普遍的に見られる諸現象を対象とした通文化展示で構成されています。また、急速に変化する世界の動きや、文化人類学・民族学の研究を迅速に展示に反映させるため、本館展示場内で企画展示も実施しています。さらに、特定のテーマについて、総合的および体系的に紹介する特別展示を開催しています。

社会還元 最先端の研究成果を一般に公開するため、学術講演会、みんぱくゼミナール、みんぱくウィークエンド・サロン、研究公演、みんぱく映画会や種々のワークショップなどをおこなっています。また、博物館学コースや技術研修などさまざまなプロジェクトを通して国際協力に貢献しています。

大学院教育 大学共同利用機関を基盤として設置された総合研究大学院大学の文化科学研究科(地域文化学専攻・比較文化学専攻、ともに博士後期課程)がおかれ、高度の大学院教育をおこない、創造性豊かな研究者を育成しています。また、諸大学の要請に応じてそれぞれの大学院教育に協力し、また大学と連携して研究指導をおこなっています。



沿革

1935	昭和10年	澁澤敬三氏、白鳥庫吉博士を中心に財団法人日本民族博物館の設立を計画
1964	昭和39年 7月	日本民族学会、日本人類学会、日本考古学協会、日本民俗学会および日本民族学協会は、「国立民族学研究博物館設置」について、文部大臣など関係方面に要望
1972	昭和47年	民族学研究博物館の調査に関する会議(座長:桑原武夫)は、文部大臣に「民族学研究博物館の基本構想について(報告)」を提出
1973	昭和48年 4月	国立民族学研究博物館(仮称)の創設準備に関する会議および創設準備室を設置
1974	昭和49年 6月	国立学校設置法の一部を改正する法律(昭和49年法律第81号)の施行により、国立民族学博物館が創設(管理部3課6係、情報管理施設2係、5研究部10研究部門)
	8月	パプアニューギニアをはじめとして、海外における標本資料などの収集を開始
1975	昭和50年 12月	旧文部省史料館が所蔵していた民族資料28,432点を国文学研究資料館から移管
1977	昭和52年 11月	国立民族学博物館新管工事(28,778㎡および環境整備)が竣工、開館式典を挙げる。オセアニア、アメリカ、ヨーロッパ、アフリカ、西アジア、音楽、言語、東南アジア、東アジア(日本の文化)展示およびビデオテークを一般公開
1978	昭和53年	民族学研究の拠点として、長期的・計画的に取り組む「特別研究」を開始
1979	昭和54年 3月	第4展示場(1,272㎡)が竣工、東アジア(日本の文化)展示を拡充し一般公開。11月に中央・北アジア、東アジア(アイヌの文化)展示を一般公開
1981	昭和56年 2月	講堂(3,704㎡)が竣工
1983	昭和58年 3月	第8展示場など(4,816㎡)が竣工。11月に東アジア(朝鮮半島の文化、中国地域の文化)展示を一般公開
1984	昭和59年 11月	創設10周年記念式典を挙げる。『国立民族学博物館十年史』を刊行
1987	昭和62年	開館10周年を迎え、記念行事を実施
1989	平成元年 4月	総合研究大学院大学文化科学研究科(地域文化学専攻・比較文化学専攻の二専攻)が本館を基盤として設置
	6月	特別展示館・書庫棟(5,292㎡)が竣工
	9月	特別展示館竣工記念第1回特別展「大アンデス文明展—よみがえる太陽の帝国インカ」を一般公開
1993	平成5年 8月	本館増築・共同研究棟(891㎡)が竣工
1994	平成6年 6月	創設20周年を迎え、記念行事を実施 地域研究企画交流センターを設置(平成17年度末に廃止)
1995	平成7年 1月	阪神・淡路大震災による被害のため、展示場を45日間にわたり全面閉鎖(2002~2003年に耐震改修工事を実施)
	4月	COE(「卓越した研究拠点」)の研究課題「地球時代におけるマルチメディアによる新しい民族学研究の展開に関する先導的研究」開始(平成11年度末に終了)
1996	平成8年 3月	第7展示棟(6,439㎡)が竣工。11月に言語展示、東南アジア展示のリニューアルおよび映像の広場、ものの広場、南アジア展示を一般公開
1997	平成9年	開館20周年を迎え、記念行事を実施。11月に記念式典を挙げる
1998	平成10年 4月	大学共同利用機関組織運営規則の一部を改正する省令(平成10年文部省令第24号)の施行により、5研究部を改組(4研究部、1研究施設)
1999	平成11年 5月	みんぱく電子ガイドおよび学習コーナー完成、一般公開
2000	平成12年 3月	東アジア(朝鮮半島の文化)展示リニューアル、以降2003年まで本館展示の一部リニューアルなど
2004	平成16年 4月	国立大学法人法(平成15年法律第112号)の施行により、大学共同利用機関法人・人間文化研究機構が充足4研究部、1研究施設を、3研究部、2研究施設に改組 研究者コミュニティの代表を含む共同利用委員会による審査システム、公募の拡大など共同研究の体制を整備 本館の組織をあげて取り組む「機関研究」を開始 創設30周年記念事業として『国立民族学博物館三十年史』の編集を開始(平成18年3月刊行)
2006	平成18年 4月	民族学資料共同利用窓口を設置
2007	平成19年	開館30周年を迎え、記念行事を実施。11月に記念式典を挙げる
2008	平成20年 2月	日本文化人類学会と連携事業に関する協定を締結
2009	平成21年 3月	西アジア、アフリカ展示を新構築、一般公開
2010	平成22年 3月	音楽、言語展示を新構築、一般公開
	4月	国際学術交流室の設置など新しい体制を整備
2011	平成23年 3月	オセアニア、アメリカ展示を新構築、一般公開
2012	平成24年 3月	ヨーロッパ展示、インフォメーションゾーンを新構築、一般公開
2013	平成25年 3月	東アジア(日本の文化「祭り」と「日々の暮らし」)展示を新構築、一般公開
	4月	監査室、梅棹資料室を設置し、新しい体制を整備
2014	平成26年 3月	東アジア(朝鮮半島の文化、中国地域の文化、日本の文化「沖縄の暮らし」と「多みんぞくニホン」)展示を新構築、一般公開
2015	平成27年 3月	南アジア、東南アジア展示を新構築、一般公開
2016	平成28年 6月	中央・北アジア、東アジア(アイヌの文化)展示を新構築、一般公開
2017	平成29年 3月	本館展示の新構築を完了し、記念式典を挙げる
	4月	3研究部、2研究施設を、4研究部、1研究施設に改組 開館40周年を迎え、記念行事を実施。11月に記念式典を挙げる。
	12月	共同利用型科学分析室を設置

歴代館長／組織

歴代館長 平成30年4月1日現在

初代 昭和49年6月－平成5年3月 梅棹忠夫 (故人) 民族学・比較文明論	第2代 平成5年4月－平成9年3月 佐々木高明 (故人) 東・南アジア農耕文化史	第3代 平成9年4月－平成15年3月 石毛直道 文化人類学	第4代 平成15年4月－平成21年3月 松園万亀雄 社会人類学	第5代 平成21年4月－平成29年3月 須藤健一 社会人類学	第6代 平成29年4月－ 吉田憲司 博物館人類学
---	--	---	---	--	--

運営組織 平成30年4月1日現在

館長 よしだけんじ 吉田憲司	副館長(研究・国際交流・IR担当) にしおてつお 西尾哲夫 グローバル現象研究部教授	副館長(企画調整担当) せきゆうじ 關 雄二 人類文明誌研究部教授	館長補佐 のぼやしあつし 野林厚志 学術資源研究開発センター教授	監査室 室長(併) しまだけんじ 島田健治 管理部長
------------------------------------	---	--	---	---

運営会議 平成30年4月1日現在

館長の要請により、本館の管理運営に関する重要事項について審議します。

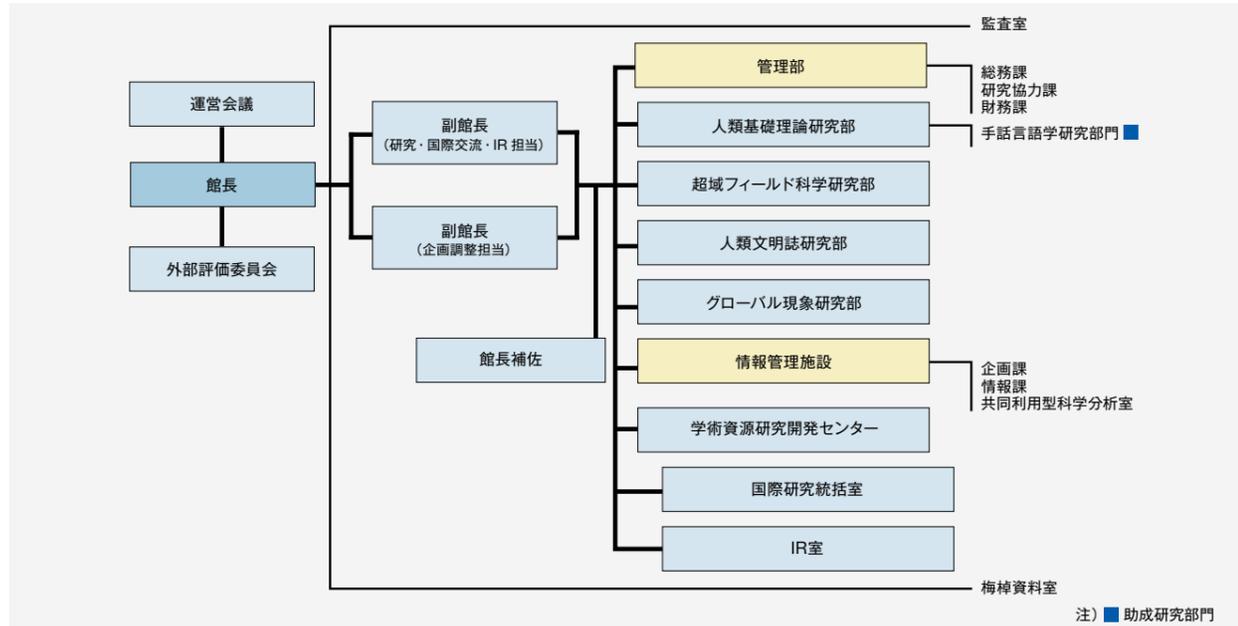
窪田幸子 神戸大学大学院国際文化科学研究科教授	富沢寿勇 静岡県立大学国際関係学部教授	齋藤 晃 国立民族学博物館人類文明誌研究部教授 (総合研究大学院大学文化科学研究科 地域文化学専攻長)	信田敏宏 国立民族学博物館 グローバル現象研究部長
栗本英世 大阪大学副学長	豊田由貴夫 立教大学観光学部教授	關 雄二 国立民族学博物館副館長(企画調整担当)・ 情報管理施設長	林 勲男 国立民族学博物館 学術資源研究開発センター長
後藤 明 南山大学人文学部教授	松田素二 京都大学大学院文学研究科教授	園田直子 国立民族学博物館人類基礎理論研究部長	平井京之介 国立民族学博物館 人類文明誌研究部長
佐野千絵 東京文化財研究所保存科学研究センター長	山梨俊夫 国立国際美術館長	西尾哲夫 国立民族学博物館副館長 (研究・国際交流・IR担当)・ 国際研究統括室長	
出口 顕 島根大学副学長	韓 敏 国立民族学博物館 超域フィールド科学研究部長		

外部評価委員会 平成30年4月1日現在

館長の要請により、本館における研究教育活動等の状況に関する点検・評価について審議します。

安達 淳 国立情報学研究所コンテンツ科学研究系・ 特任研究員(特任教授)	萱島信子 独立行政法人国際協力機構JICA研究所所長	水沢 勉 神奈川県立近代美術館長	山下晋司 帝京平成大学現代ライフ学部教授 東京大学名誉教授
池田博之 公益財団法人りそなアジア・オセアニア財団理事長	八村廣三郎 立命館大学情報理工学部特任教授	山極壽一 京都大学総長	山本真鳥 法政大学経済学部教授
	堀井良殷 公益財団法人関西・大阪21世紀協会理事長		

組織構成図 平成30年4月1日現在



名誉教授 平成30年4月1日現在

昭和59年4月1日 (称号授与年月日) 祖父江孝男 (故人) 心理人類学	平成7年4月1日 周 達生 (故人) 物質文化論	平成14年4月1日 森田恒之 保存科学・民族技術	平成18年4月1日 野村雅一 (故人) 身体コミュニケーション論・ 南欧民族学	平成27年4月1日 庄司博史 言語学・言語政策論
昭和60年4月1日 岩田慶治 (故人) 文化人類学	平成7年4月1日 松澤貞子 社会人類学	平成15年4月1日 石毛直道 文化人類学	平成19年4月1日 大森康宏 映像人類学・民族誌映画	平成27年4月1日 八杉佳穂 言語人類学・中米文化史
昭和61年4月1日 加藤九祚 (故人) 北・中央アジア民族史	平成8年4月1日 大丸 弘 (故人) 衣生活とその周辺の比較生活史	平成15年4月1日 栗田靖之 博物館人類学・ブータン研究	平成19年4月1日 山本紀夫 民族植物学	平成28年4月1日 朝倉敏夫 韓国社会研究
昭和63年4月1日 伊藤幹治 (故人) 宗教人類学	平成8年4月1日 友枝啓泰 (故人) 社会人類学	平成15年4月1日 杉田繁治 コンピュータ民族学・文明学	平成21年4月1日 松園万亀雄 社会人類学	平成28年4月1日 佐々木史郎 文化人類学・北アジア研究
昭和63年4月1日 中村俊亀智 (故人) 民族技術学・用具論	平成8年4月1日 藤井知昭 民族音楽学・音楽人類学	平成16年4月1日 熊倉功夫 日本文化史	平成22年4月1日 松山利夫 オーストラリア先住民研究	平成28年4月1日 杉本良男 社会人類学・南アジア研究
平成元年4月1日 君島久子 中国民間伝承	平成9年4月1日 佐々木高明 (故人) 東・南アジア農耕文化史	平成16年4月1日 立川武蔵 宗教哲学・仏教思想	平成23年4月1日 長野泰彦 言語学・チベットビルマ語研究	平成29年4月1日 須藤健一 社会人類学
平成2年4月1日 和田祐一 (故人) 言語人類学	平成9年4月1日 杉村 棟 民族芸術学	平成16年4月1日 田邊繁治 東南アジア社会人類学	平成24年4月1日 秋道智彌 生態人類学・海洋民族学	平成29年4月1日 竹沢尚一郎 宗教人類学・西アフリカ研究
平成3年4月1日 垂水 稔 (故人) 空間領域の人類学	平成10年4月1日 和田正平 比較文化論・アフリカ民族学	平成16年4月1日 藤井龍彦 新大陸先史学	平成24年4月1日 中牧弘允 宗教人類学・経営人類学	平成29年4月1日 塚田誠之 歴史民族学・中国研究
平成4年4月1日 杉本尚次 文化地理学・文化人類学	平成12年4月1日 清水昭俊 家族比較論・オセアニア研究	平成16年4月1日 山田陸男 (故人) ラテンアメリカ史・ ラテンアメリカ地域研究	平成26年4月1日 小林繁樹 道具人類学・文化人類学・ 博物館学	平成30年4月1日 印東道子 オセアニア考古学
平成5年4月1日 梅棹忠夫 (故人) 民族学・比較文明論	平成13年4月1日 黒田悦子 民族社会文化論・中米人類学	平成17年4月1日 江口一久 (故人) 民族言語学・口承文芸論	平成26年4月1日 田村克己 東南アジア文化人類学	平成30年4月1日 横山廣子 文化人類学・中国社会研究
平成5年4月1日 大給近達 (故人) ラテンアメリカ文化構造	平成13年4月1日 崎山 理 言語人類学・オセアニア言語学	平成17年4月1日 大塚和義 アイヌ民族学・北アジア研究	平成26年4月1日 吉本 忍 民族工芸論・民族技術論	
平成5年4月1日 片倉素子 (故人) 社会地理学・民族学	平成13年4月1日 端 信行 経済人類学・アフリカ民族学	平成17年4月1日 松原正毅 社会人類学・遊牧社会論	平成27年4月1日 久保正敏 民族情報学・ コンピュータ民族学・ オーストラリア研究	
平成6年4月1日 竹村卓二 (故人) 社会人類学	平成14年4月1日 小山修三 民族考古学	平成18年4月1日 石森秀三 観光文明学・文化開発論		

評価

本館は、大学共同利用機関法人・人間文化研究機構の一員として文部科学大臣が進める6年間の中期目標に基づく中期計画及び年度計画を策定し、その実施状況について国立大学法人評価委員会の評価を受けています。

上記の評価のほか、本館独自で自己点検・評価を実施しており、本館の研究教育活動等の状況をまとめた「自己点検報告書」を作成しています。また、外部評価委員会を設けており、委員の意見ならびに委員会の記録、「自己点検報告書」などの関係資料を教職員をはじめ関係者に広く知らしめるとともに、館運営の改善に活用しています。

外来研究員 平成29年度

本館では、国内外の研究者を外来研究員として受け入れています。平成29年度は、16の国・地域からの25人の外国籍の研究者を含む、103人の研究者を受け入れました。

特別共同利用研究員 平成29年度

本館は、大学共同利用機関として全国の国公立大学の博士後期課程に在籍する学生を、当該学生の所属する大学院研究科からの委託を受けて特別共同利用研究員として受け入れています。特別共同利用研究員は、各々の特定の研究課題に応じて、本館の指導教員から研究指導を受け、本館の諸施設を利用し研究を遂行するとともに、本館に設置されている、総合研究大学院大学文化科学研究科(地域文化学専攻・比較文化学専攻)の教育プログラムに一部参加することができます。平成29年度は、国立大学より2名私立大学より2名受け入れました。

事務組織 平成30年4月1日現在

管理部 しまだけんじ
部長 島田健治

情報管理施設 せき ゆうじ
施設長(併) 關雄二
しまだけんじ
副施設長(併) 島田健治

総務課

課長 つねよし ゆうじ
恒吉祐治
課長補佐 なかの てつや
中野哲也

研究協力課

課長 せり まさのり
世利政則
課長補佐 かじわら こうじ
梶原孝次

財務課

課長 なかい あきら
仲井 章
課長補佐 いとう しんいち
伊藤眞一

企画課

課長 かおくに せいじ
包国征治

情報課

課長 いまなか ひろゆき
今中弘幸
課長補佐 なかむら ふとし
中村 太

現員

平成30年8月1日現在

区分	館長	教授	准教授	助教	特任教授	特任准教授	特任助教	小計	事務職員 技術職員含む	合計
現員	1	21	25	3	1	0	1	52	48	100
客員(国内)		7	4					11		11
客員(国外)		2	2					4		4
館長	1							1		1
監査室									(1)	(1)
管理部									27	27
情報管理施設									21	21
研究部		16	21	3	1	0	1	42		42
学術資源研究 開発センター		5	4	0				9		9

注)客員は外数 ()内は兼務 事務職員には特任専門職員1名を含む

予算

平成29年度

収入

区分	単位:百万円
運営費交付金	2,654
基幹運営費交付金	2,306
特殊要因運営費交付金	229
機構連携経費等	119
収入	73
入場料	23
大学院教育	35
その他	15
施設整備費補助金	23
科学研究費補助金	287
注)補正後の予算額	計 3,037

支出

区分	単位:百万円
人件費	1,107
物件費	1,643
教育研究経費	457
一般管理費	691
共同利用経費	472
施設費	23
科学研究費補助金	287
注)補正後の予算額	計 3,037

平成30年度

収入

区分	単位:百万円
運営費交付金	2,510
基幹運営費交付金	2,281
特殊要因運営費交付金	229
収入	40
入場料	26
その他	14
注)年度計画予算額	計 2,550

支出

区分	単位:百万円
人件費	1,129
物件費	1,421
教育研究経費	318
共同利用経費	654
一般管理費	449
注)年度計画予算額	計 2,550

施設

建設の基本構想

敷地全体が公園計画に調和するように、建物の高さを全体的にできる限り低くおさえ、伝統的な日本建築のもつ美の特色を活かしています。平面計画は複数のブロックによって構成されており、それぞれのブロック外壁は原則として採光をおこなわないことになっていますが、展示場の内側には採光が可能なパティオ(中庭)を設けています。

各パティオは、建築内部に屋外の環境を持ち込むばかりでなく、屋外展示スペースとしても利用することができます。

動線計画は、1階に収蔵、2階に展示、3・4階に研究の機能をまとめて配置し、エレベータ・階段で垂直に最短距離で結んでいます。

とくに展示のための観客の動線は、全体を詳細にみることも、一部分展示ブロックを簡略してみることも可能な回遊方式になっています。

また、ユニバーサルデザインを積極的に導入し、点字ブロックの設置などバリアフリー化をおこなっています。

施設の概要

敷地面積=40,821㎡
建築面積=18,177㎡
建築延床面積=52,648㎡

4階 7,207㎡
研究部門

2階 中2階を含む 16,830㎡
展示・管理部門

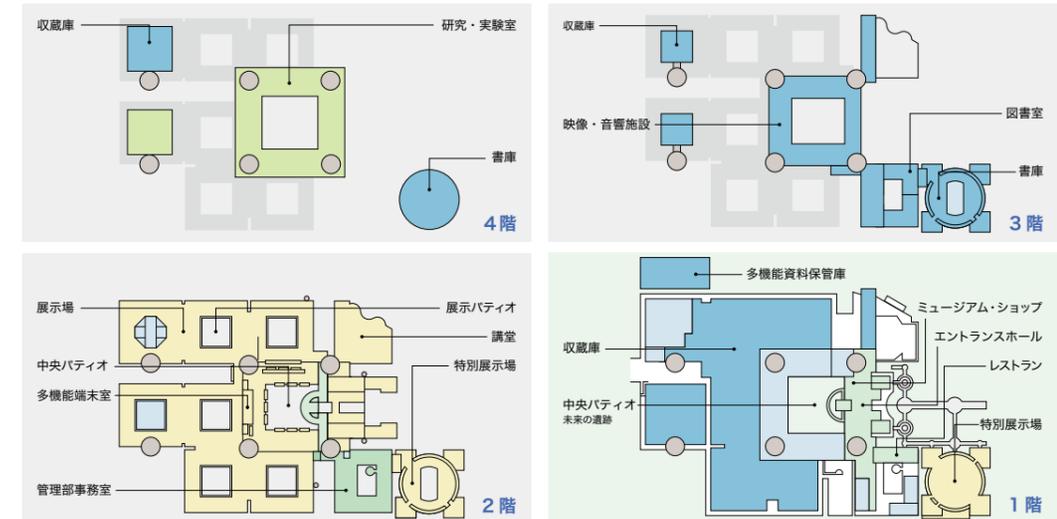
(内 本館展示場 10,938㎡ 特別展示場 1階 851㎡ 2階 639㎡)

3階 中3、中4階を含む 7,340㎡
研究・図書・管理部門

1階 多機能資料保管庫含む 17,410㎡
エントランス・収蔵・サービス部門

屋階 846㎡

地階 3,015㎡



特別研究

特別研究は、平成28年度から始まった第3期中期目標期間の6年間を通じて、「現代文明と人類の未来—環境・文化・人間」を統一テーマに、現代文明が直面する喫緊の諸課題に対して解決志向型のアプローチにより実施する国際共同研究です。

近現代のヨーロッパに発する科学・技術、政治・経済制度、社会組織、思想などからなる西欧文明は、世界の多くの国と地域に影響を与え、科学・技術の発展は、人類の生活と社会を豊かにすると信じられてきました。しかし、人口増加、環境破壊、戦争、資源枯渇、水不足、大気汚染など、大きな負の代償を人類社会にもたらしているとも言えます。特に環境問題と人口増加は、解決を要する大きな課題です。前者は、生活空間・食料資源・生物の多様性から、戦争・公害・地球温暖化・災害など、人間生活のあらゆる面に影響を及ぼしています。後者は、2060年には100億人を超え、2100年には地球の人口支持力(環境収容力)120億人に近づく一方、先進国では少子高齢化が進み、家族や人間集団の維持・存続に多くの問題をもたらしています。このような状況において、文明に対応してきた現地社会の「知」から現代文明を問い直すために、特別研究を現代の人類社会が直面する諸課題の分析と解決を志向する研究として位置づけ、環境問題や人口をめぐる地球規模の変動について直接的・間接的に起因する対立軸となる文化現象を設定します。グローバル空間・地域空間・社会空間が構成する多層的生活空間における現代の問題系としてアプローチすることで、旧来の(伝統的な)価値から、いかに多層的価値の共存を保障する社会を創成することができるかを解明し、人類社会にとって選択可能な問題解決を志向する未来ビジョンを提出することをめざします。

平成28年度実施プロジェクト

プロジェクトリーダー	プロジェクト名
池谷和信・岸上伸啓	生物・文化的多様性の歴史生態学—稀少動物・稀少植物の利用と保護を中心に—
野林厚志	食料生産システムの文明論

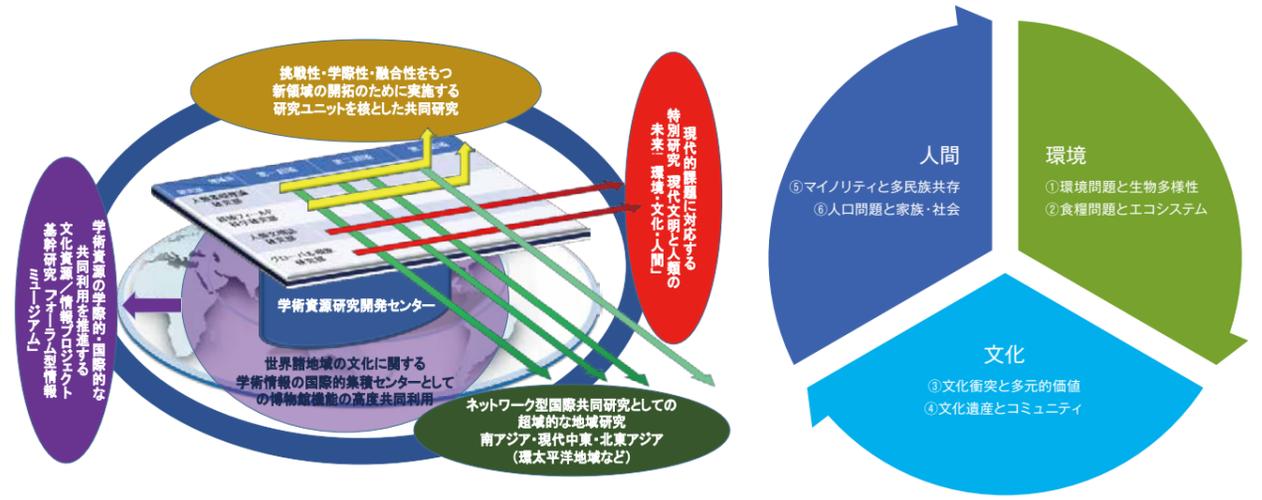
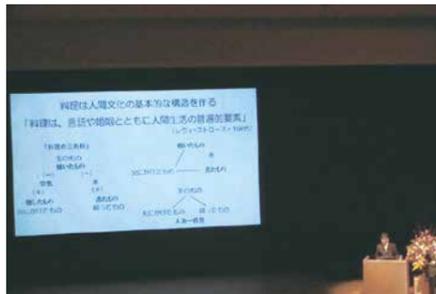
平成29年度実施プロジェクト

プロジェクトリーダー	プロジェクト名
池谷和信・岸上伸啓	生物・文化的多様性の歴史生態学—稀少動物・稀少植物の利用と保護を中心に—

国際シンポジウム
 「歴史生態学から見た人と生き物の関係」
 “Human Relationships with Animals and Plants: Perspectives of Historical Ecology”
 実施日 平成30年3月19日～21日
 研究代表者 池谷和信・岸上伸啓
 参加者総数 134名



学術講演会
 「みんなく公開講演会 料理と人間—食から成熟社会を問いなおす」
 実施日 平成29年11月17日
 研究代表者 野林厚志
 参加者総数 407名



環境や人口をめぐる地球規模の変動に直接的・間接的に起因する対立軸となる文化現象を設定し、グローバル空間・地域空間・社会空間が構成する多層的生活空間における現代の問題系としてアプローチすることで、旧来の(伝統的な)価値からいかに多層的価値の共存を保障する社会を創成することができるかを解明し、人類社会にとって選択可能な問題解決を志向する未来ビジョンを提出する。

特別研究一覧 平成28年度～平成33年

統一テーマ「現代文明と人類の未来—環境・文化・人間」

【テーマ区分・環境】			
研究代表者	研究プロジェクト	区分	研究期間
池谷和信・岸上伸啓	生物・文化的多様性の歴史生態学—稀少動物・稀少植物の利用と保護を中心に—	①環境問題と生物多様性	平成28年7月～平成31年3月
野林厚志	食料生産システムの文明論	②食料問題とエコシステム	平成29年4月～平成32年3月
【テーマ区分・文化】			
研究代表者	研究プロジェクト	区分	研究期間
西尾哲夫	グローバル時代における文化衝突と多層的価値共創社会の可能性(仮題)	③文化衝突と多層的価値	平成32年4月～平成35年3月
關 雄二	文化遺産のグローバル化とコミュニティの再活性化	④文化遺産とコミュニティ	平成31年4月～平成34年3月
【テーマ区分・人間】			
研究代表者	研究プロジェクト	区分	研究期間
寺田吉孝	パフォーミング・アーツと積極的共生	⑤マイノリティと多民族共存	平成30年4月～平成33年3月
林 勲男	人口変動と地域社会・文化の持続性(仮題)	⑥人口問題と家族・社会	平成33年4月～平成36年3月

人類の文化資源に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築 (人間文化研究機構 機関拠点型基幹研究プロジェクト)

みんぱくでは、開館以来世界の民族と文化、社会を研究し、多様な有形・無形の民族資料とそれらに関連する情報を集積してきました。併せて本館では、国内外の複数の研究機関、大学、博物館、現地社会と連携しながら民族資料と関連情報について国際共同研究を推進しています。私たちは、これらの資料と関連情報を「人類の文化資源」として同時代の人びとと共有し、かつ後世に伝えたいと考えています。この実現のため、グローバルな共同利用デジタル・データバンクとして「フォーラム型情報ミュージアム」を創出し、人類の文化資源に関する情報の発信、交換、生成、共有化を図ります。このミュージアムによって、研究者コミュニティのみならず、文化資源を作り出した現地社会との双方向的な交流も実現したいと考えます。4年目となる平成29年度は、開発型プロジェクト4件、強化型プロジェクト7件、合わせて11件のプロジェクトを実施しました。なお、この事業は人間文化機構機関拠点型基幹研究プロジェクトとして位置づけられています。

「人類の文化資源に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築」研究プロジェクト

代表者※	プロジェクト名	区分	期間※※
伊藤敦規	北米先住民民族誌資料の文化人類学的ドキュメンテーションと共有	開発型	平成26年6月～平成30年3月
野林厚志	台湾および周辺島嶼生態環境における物質文化の生態学的適応	開発型	平成27年4月～平成31年3月
齋藤玲子	民博が所蔵するアイヌ民族資料の形成と記録の再検討	開発型	平成28年4月～平成32年3月
飯田 卓	アフリカ資料の多言語双方向データベースの構築	開発型	平成29年4月～平成33年3月
岸上伸啓	北米北方先住民の文化資源に関するデータベースの構築に関する研究——民博コレクションを中心に	強化型	平成28年1月～平成29年12月
横山廣子	中国地域の文化展示のフォーラム型情報ミュージアムの構築	強化型	平成28年4月～平成30年3月
飯田 卓	日本民族学会附属民族学博物館(保谷民博)資料の履歴に関する研究と成果公開	強化型	平成28年4月～平成30年3月
福岡正太	楽器に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築	強化型	平成28年4月～平成30年3月
日高真吾	日本の文化展示場関連資料の情報公開プロジェクト	強化型	平成28年4月～平成30年3月
西尾哲夫	中東地域民衆文化資料コレクションを中心とするフォーラム型情報データベース	強化型	平成29年4月～平成31年3月
太田心平	朝鮮半島関連の資料データベースの強化と国際的な接合に関する日米共同研究	強化型	平成29年4月～平成32年3月

プロジェクト区分について

1. 開発型プロジェクト

プロジェクト代表者のもと、国内外の協定機関と連携しながら文化資源に関する各機関が持つ情報を共有化し、それをもとに国際共同研究を実施しつつ、データベースのコンテンツを作成するものです。データベースは、共通項目以外は、画像や音声資料も活用してマルチメディア化するなど、プロジェクトごとの独自性を重視します。

2. 強化型プロジェクト

民博の文化資源に関する既存の情報を整理し、新しい情報を付加し、精緻化することによって、既存のデータベースをさらに高度化するものです。

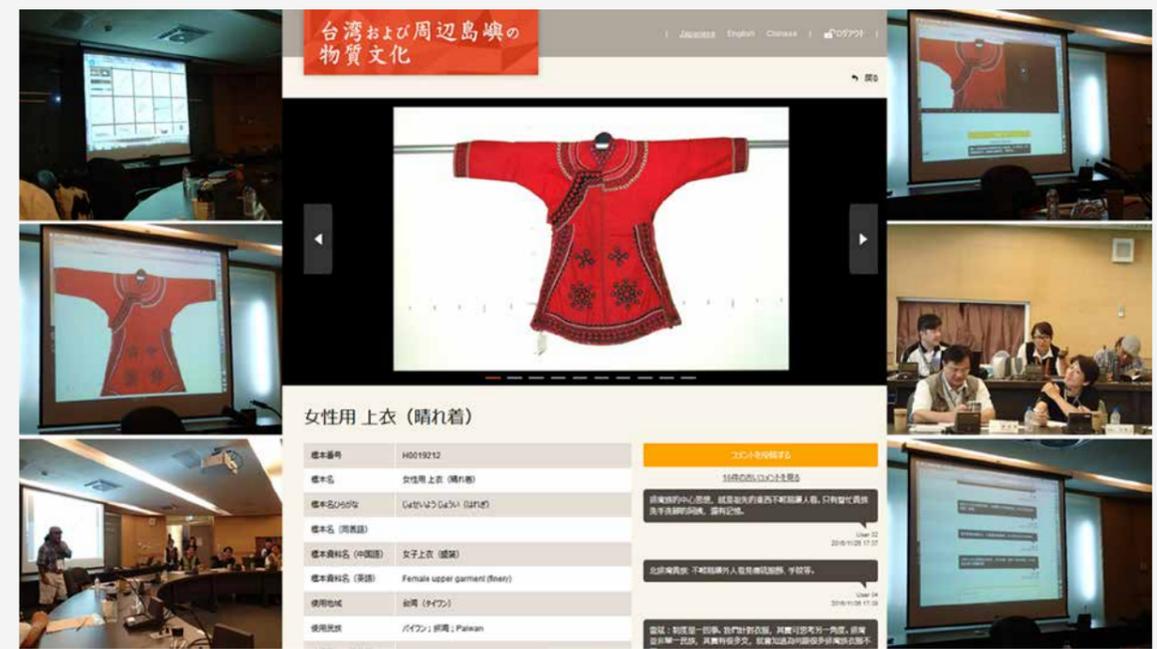
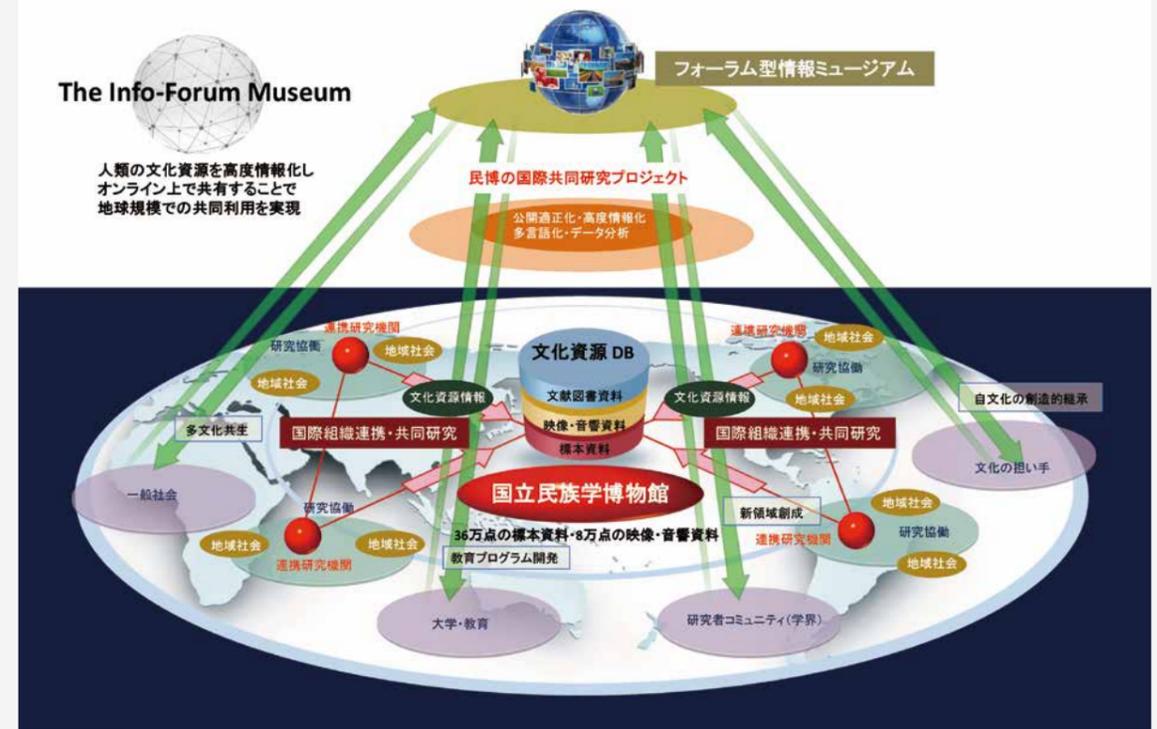


国際ワークショップ「博物館とディセンダントコミュニティおよびソースコミュニティとの協働——米ニューメキシコ州Mimbres遺跡出土資料熟覧と遺跡実見を介したアート作品制作と展示計画」



国際ワークショップ「博物館資料とソースコミュニティとの『再会』の地元教育現場への展開——米先住民ホビの七〇年間にわたる銀細工制作を事例として」

人類の文化資源に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築



開発型プロジェクト「台湾および周辺島嶼生態環境における物質文化の生態学的適応」台湾で開催されたヒレッジミーティング

共同利用型研究

共同研究

文化人類学・民族学および関連分野の特定のテーマについて館内外の専門家が共同でおこなう研究です。

平成29年度は、館外より国立大学180名、公立大学15名、私立大学151名、民間機関など113名の専門家とともに研究をおこないました(平成30年3月現在)。

平成29年度 共同研究課題 ○印は館外研究者による実施課題

【一般】

研究代表者	研究課題	研究期間	共同研究員数						
			館内	国立大学	公立大学	私立大学	民間機関など	総計	
課題1：文化人類学・民族学および関連諸分野を含む幅広い研究									
上羽陽子	現代「手芸」文化に関する研究	平成26年10月1日～平成30年3月31日	4	5	2	5	1	17	
齋藤 晃	近世カトリックの世界宣教と文化順応	平成26年10月1日～平成30年3月31日	1	9	0	2	0	12	
森 明子	家族と社会の境界面の編成に関する人類学的研究—保育と介護の制度化/脱制度化を中心に	平成26年10月1日～平成30年3月31日	3	10	0	6	0	19	
○ 太田好信	政治的分類——被支配者の視点からエスニシティと人種を再考する	平成26年10月1日～平成30年3月31日	3	8	1	4	0	16	
○ 川田牧人	呪術的实践=知の現代的位相——他の諸実践=知との関係性に着目して	平成26年10月1日～平成30年3月31日	3	6	0	5	0	14	
○ 長谷川 清	資源化される「歴史」——中国南部諸民族の分析から	平成26年10月1日～平成30年3月31日	4	7	0	6	0	17	
松尾瑞穂	グローバル化時代のサブスタンスの社会的布置に関する比較研究	平成27年10月1日～平成31年3月31日	2	8	1	1	1	13	
山中由里子	驚異と怪異——想像界の比較研究	平成27年10月1日～平成31年3月31日	3	3	1	7	5	19	
丹羽典生	応援の人類学——政治・スポーツ・ファン文化からみた利他性の比較民族誌	平成27年10月1日～平成31年3月31日	4	9	1	7	0	21	
○ ERTL, John	考古学の民族誌——考古学的知識の多様な形成・利用・変成過程の研究	平成27年10月1日～平成31年3月31日	4	7	0	1	5	17	
○ 岡田浩樹	宇宙開発に関する文化人類学からの接近	平成27年10月1日～平成31年3月31日	3	6	1	4	1	15	
○ 中原聖乃	放射線影響をめぐる「当事者性」に関する学際的研究	平成27年10月1日～平成31年3月31日	2	3	0	5	5	15	
○ 飯田淳子	医療者向け医療人類学教育の検討——保健医療福祉専門職との協働	平成27年10月1日～平成31年3月31日	3	4	0	5	4	16	
○ 齋藤 剛	個-世界論——中東から広がる移動と遭遇のダイナミズム	平成27年10月1日～平成31年3月31日	2	8	1	4	0	15	
○ 市野澤 潤平	確率的事象と不確実性の人類学——「リスク社会」化に抗する世界像の描出	平成27年10月1日～平成31年3月31日	1	6	0	6	0	13	
岸上伸啓	捕鯨と環境倫理	平成28年10月1日～平成32年3月31日	2	8	1	4	3	18	
卯田宗平	もうひとつのドメスティケーション——家畜化と栽培化に関する人類学的研究	平成28年10月1日～平成31年3月31日	3	9	1	2	2	17	
出口正之	会計学と人類学の融合	平成28年10月1日～平成31年3月31日	5	2	0	6	1	14	
廣瀬浩二郎	「障害」概念の再検討——触文化論に基づく「合理的配慮」の提案に向けて	平成28年10月1日～平成31年3月31日	2	2	0	7	4	15	
○ 野澤豊一	音楽する身体間の相互作用を捉える——ミュージッキングの学際的研究	平成28年10月1日～平成32年3月31日	4	7	1	5	0	17	
○ 浮ヶ谷 幸代	現代日本における「看取り文化」の再構築に関する人類学的研究	平成28年10月1日～平成32年3月31日	1	1	0	3	4	9	
○ 中生勝美	人類学/民俗学の学知と国民国家の関係——20世紀前半のナショナリズムとインテリジェンス	平成29年10月1日～平成33年3月31日	2	7	0	4	1	14	
○ 中川 敏	文化人類学を自然化する	平成29年10月1日～平成33年3月31日	1	8	0	1	0	10	
○ 田沼幸子	ネオリベラリズムのモラルティ	平成29年10月1日～平成33年3月31日	2	3	2	5	0	12	
課題2：本館の所蔵する資料(標本資料, 文献資料, 映像音響資料等)に関する研究									
○ 是澤博昭	モノにみる近代日本の子どもの文化と社会の総合的研究——国立民族学博物館所蔵多田コレクションを中心に	平成26年10月1日～平成30年3月31日	2	0	0	6	6	14	
長野泰彦	チベット仏教古派及びボン教の護符に関する記述研究	平成27年10月1日～平成31年3月31日	3	3	0	5	1	12	
池谷和信	世界のピースをめぐる人類学的研究	平成28年10月1日～平成30年3月31日	6	7	0	5	2	20	
縄田浩志	物質文化から見るアフロ・ユーラシア沙漠社会の移動戦略に関する比較研究	平成28年10月1日～平成32年3月31日	2	4	0	4	6	16	
園田直子	博物館における持続可能な資料管理および環境整備——保存科学の視点から	平成29年10月1日～平成33年3月31日	6	1	0	1	7	15	
			計	83	161	13	126	59	442

【若手】

研究代表者	研究課題	研究期間	共同研究員数						
			館内	国立大学	公立大学	私立大学	民間機関など	総計	
課題1：文化人類学・民族学および関連諸分野を含む幅広い研究									
○ 大石高典	消費からみた狩猟研究の新展開——野生獣肉の流通と食文化をめぐる応用人類学的研究	平成28年10月1日～平成31年3月31日	2	5	0	4	1	12	
○ 平田晶子	テクノロジー利用を伴う身体技法に関する学際的研究	平成28年10月1日～平成31年3月31日	1	1	1	6	0	9	
八木百合子	モノをとらえてみる現代の宗教的世界の諸相	平成29年10月1日～平成32年3月31日	1	4	1	3	3	12	
課題2：本館の所蔵する資料(標本資料, 文献資料, 映像音響資料等)に関する研究									
○ 呉屋淳子	高等教育機関を対象にした博物館資料の活用に関する研究	平成27年10月1日～平成30年3月31日	4	0	2	5	3	14	
			計	8	10	4	18	7	47
			合計	91	171	17	144	66	489

共同研究会の公開

平成16年度より共同研究会の一部が、一般向けに公開されています。平成29年度実績は以下のとおりです。

開催日	研究会名	場所	参加者数
平成29年6月24日(土)	会計学と人類学の融合	国立民族学博物館 4階 第3演習室	14
平成29年7月29日(土)	消費からみた狩猟研究の新展開——野生獣肉の流通と食文化をめぐる応用人類学的研究	国立民族学博物館 2階 第7セミナー室	24
平成29年10月21日(土)	会計学と人類学の融合	国立民族学博物館 2階 第4セミナー室	11
平成29年11月3日(金・祝)	驚異と怪異——想像界の比較研究	慶應義塾大学 北館ホール	60
平成29年11月25日(土)	テクノロジー利用を伴う身体技法に関する学際的研究	国立民族学博物館 2階 第4セミナー室	7
平成29年12月25日(月)	会計学と人類学の融合	国立民族学博物館 2階 第4セミナー室	20
平成30年1月27日(土)	音楽する身体間の相互作用を捉える——ミュージッキングの学際的研究	国立民族学博物館 2階 第4セミナー室	26
平成30年2月12日(月)	捕鯨と環境倫理	国立民族学博物館 2階 第4セミナー室	33
平成30年2月25日(日)	会計学と人類学の融合	国立民族学博物館 4階 第3演習室	10

科学研究費助成事業による研究プロジェクト

科学研究費助成事業は、我が国の学術を振興するため、人文・社会科学から自然科学まであらゆる分野における優れた独創的・先駆的な研究を格段に発展させることを目的とする研究助成費で、大学などの研究者または研究者グループが自発的に計画する基礎的研究のうち、学術研究の動向に即して特に重要なものを取り上げ、研究費の助成をするものです。

平成30年度採択課題

研究種目	研究代表者	研究課題	配分額(千円)	
継続	新学術領域研究(研究領域提案型)	鈴木 紀	植民地時代から現代の中南米の先住民文化	6,240
継続	新学術領域研究(研究領域提案型)	野林厚志	人類集団の拡散と定着にともなう文化・行動変化の文化人類学的モデル構築	24,050
			計2件	30,290
継続	新学術領域研究「学術研究支援基盤形成」	吉田憲司	地域研究に関する学術写真・動画資料情報の統合と高度化	39,000
			計1件	39,000
継続	※国際共同研究 加速基金(国際共同研究強化)	伊藤敦規	日本国内の民族学博物館資料を用いた知の共有と継承に関する文化人類学的研究(国際共同研究強化)	14,690
継続	※国際共同研究 加速基金(国際共同研究強化)	竹村嘉晃	移民の身体ポリテクス:インド舞踊のグローバル化とエージェンシー	15,340
			計2件	30,030
継続	基盤研究(A)	須藤健一	ネットワーク型博物館学の創成	8,320
継続	基盤研究(A)	吉田憲司	アフリカにおける文化遺産の継承と集団のアイデンティティ形成に関する人類学的研究	6,500
継続	基盤研究(A)	齋藤 晃	アンデスにおける植民地的近代—副王トレドの総集住化の総合的研究	6,240
継続	基盤研究(A)	岸上伸啓	グローバル化時代の捕鯨文化に関する人類学的研究—伝統継承と反捕鯨運動の相克	7,930
継続	基盤研究(A)	長野泰彦	チベット・ビルマ語族の繋聯言語の記述とその古態析出に関する国際共同調査研究	11,830
継続	基盤研究(A)	関 雄二	アンデス文明における権力生成と社会的記憶の構築	10,270
継続	基盤研究(A)	小長谷有紀	モンゴルに関する画像記録を用いた地域像の再構築	8,190
新規	基盤研究(A)	山中由里子	超常認識と自然観をめぐる比較心学史の構築	10,270
新規	基盤研究(A)	林 勲男	大規模災害に関する集合的記憶の物象化・物語化と防災教育	8,320
			計9件	77,870
継続	基盤研究(B)	南 真木人	2015年ネパール地震後の社会再編に関する災害民族誌的研究	4,290
継続	基盤研究(B)	西尾哲夫	中東地域における民衆文化の資源化と公共的コミュニケーション空間の再グローバル化	3,640
継続	基盤研究(B)	西尾哲夫	シンドバード航海記の成立過程と多元的価値共創文学の可能性に関する物語情報学的研究	3,120
継続	基盤研究(B)	MATTHEWS, Peter J.	東南アジアにおけるサトイモの遺伝的多様性のマッピングによる栽培化モデルの検証	4,680
新規	基盤研究(B)	日高真吾	教育資源・観光資源としての地域文化遺産の活用と保存	10,270
新規	基盤研究(B)	園田直子	セルロースナノファイバー塗工法による脆弱化した酸性紙資料の大量強化処理の開発	7,800
			計6件	33,800
継続	基盤研究(C)	笹原亮二	本州とその周辺の島々及び多島海海域における民俗芸能の研究	780
継続	基盤研究(C)	卯田宗平	ポスト家畜化時代の鶏飼文化とリバランス論—新たな人・動物関係論の構築と展開	1,040
継続	基盤研究(C)	藤本透子	カザフスタンにおける伝統医療とイスラームの人類学的研究	1,040
継続	基盤研究(C)	竹村嘉晃	スリランカ系タミル人によるインド舞踊の発展と再々構築化に関する全体関連的研究	1,560
継続	基盤研究(C)	西 佳代	1950年代アメリカ海軍のグアム島における風下被ばく調査に関する研究	260
継続	基盤研究(C)	村尾静二	デジタル時代に求められる映像人類学—新たな映像民族誌の創造に向けて	1,170
継続	基盤研究(C)	杉本 敦	農の「EU化」に伴うトランシルヴァニア牧畜の再編に関する文化人類学的研究	910
継続	基盤研究(C)	永田貴聖	京都市東九条における日本人・在日コリアン・フィリピン人の関係形成についての人類学	1,040
継続	基盤研究(C)	新本万里子	生理用品の受容によるケガレ観の変容に関する文化人類学的研究	1,300
継続	基盤研究(C)	伊藤 悟	中国西南タイ民族における詩的オラリティの継承と創造的実践に関する研究	2,080
新規	基盤研究(C)	廣瀬浩二郎	触察の方法論の体系化と視覚障害者の野外空間のイメージ形成に関する研究	1,820
新規	基盤研究(C)	中道静香	「千夜一夜」をめぐる写本・刊本の編纂過程と書物文化の諸相	650
新規	基盤研究(C)	盛 恵子	セネガル、ニアセン教団における女性の宗教的権威の伸張	1,560
新規	基盤研究(C)	川瀬 慈	アフリカの無形文化を対象にした民族誌映画の制作による応用映像人類学的研究	1,300
新規	基盤研究(C)	児玉 徹	ワインツリズム推進策の国際比較的見地からの政策人類学的な分析	1,690
新規	基盤研究(C)	福岡正太	島嶼社会における芸能伝承の課題—対話と発見の場としての映像を活用したアプローチ	1,560
新規	基盤研究(C)	平井京之介	ポスト紛争期の水俣における「負の遺産」の生成過程に関する博物館人類学的研究	780
新規	基盤研究(C)	鈴木七美	米国での認知症高齢者を師とする人生語り記録の多世代協働とコミュニティ教育の展開	1,040
			計18件	21,580

研究種目	研究代表者	研究課題	配分額(千円)	
継続	若手研究(A)	吉岡 乾	北パキスタン諸言語の記述言語学的研究	2,860
継続	若手研究(A)	末森 薫	中国甘肅仏教石窟壁画の制作技法に関する多面的研究	1,300
継続	若手研究(A)	鈴木博之	チベット文化圏東部の未記述言語の解明と地理言語学的研究	2,860
			計3件	7,020
継続	若手研究(B)	松尾瑞穂	現代インドにおける遺伝子の社会的配置に関する人類学的研究	260
継続	若手研究(B)	登 久希子	社会をつくる芸術:「ソーシャリー・エンゲイジド・アート」の人類学的研究	1,170
継続	若手研究(B)	相島葉月	エジプト人空手家によるネイションの実践とグローバル化に関する社会人類学的研究	1,040
継続	若手研究(B)	八木百合子	アンデスにおける聖人信仰の展開に関する人類学的研究—聖像の所有と継承に注目して	1,170
継続	若手研究(B)	栗山新也	三線が引き出す社会関係、価値、感情—大衆楽器が人びとに与える効果の研究	780
			計5件	4,420
新規	若手研究	黒田賢治	現代イランにおける長期的紛争介入構造をめぐる殉教概念の変容と政治言説化の研究	1,300
新規	若手研究	彭 宇潔	アフリカ熱帯雨林における狩猟採集民の生態資源獲得の行動に関する人類学的研究	1,950
新規	若手研究	萩原卓也	身体性を基盤とした他者との共存の可能性を探索する—ケニアの自転車競技選手を事例に	780
新規	若手研究	神野知恵	近現代の日本と韓国における門付け芸能の変遷—伊勢大神楽と韓国農楽を中心に	1,430
			計4件	5,460
継続	挑戦的萌芽研究	相良啓子	日本手話と台湾手話の歴史変化の解明: 歴史社会言語学の方法論の確立に向けて	650
			計1件	650
継続	挑戦的研究(開拓)	出口正之	個別文化の標準化問題に関する文化人類学と会計学の学際的共同研究	6,240
			計1件	6,240
継続	研究活動スタート支援	早川真悠	アフリカにおける価値の計量と個別的アカウンタビリティにかんする人類学的研究	1,300
			計1件	1,300
新規	研究成果公開促進費(学術図書)	長野泰彦	嘉戎語文法研究	1,700
新規	研究成果公開促進費(学術図書)	高木 仁	人とウミガメの民族誌—ニカラグア先住民の商業的ウミガメ漁—	1,100
新規	研究成果公開促進費(学術図書)	山本紀夫	熱帯高地の世界	1,700
継続	研究成果公開促進費(データベース)	高橋晴子	服装・身装文化デジタルアーカイブ	5,500
新規	研究成果公開促進費(データベース)	久保正敏	梅棹忠夫資料のデジタルアーカイブズ	3,800
			計5件	13,800
継続	特別研究員奨励費	安念真衣子	ネパールにおける教育の市場化と生活世界の変容—貧困層の親族・移動・暴力に着目して	1,040
継続	特別研究員奨励費	上畑 史	セルビアにおけるポップフォークと民俗音楽の比較分析による文化的連関の研究	1,430
継続	特別研究員奨励費	藤井真一	贈与交換による平和の構築・維持・再生産に関する人類学研究—ソロモン諸島の事例から	1,430
継続	特別研究員奨励費	鈴木康平	ユーラシアステップにおける持続的草原利用の体系化と実践	1,430
継続	特別研究員奨励費	田村卓也	ケニア共和国の海村における漁場の成り立ちと利用に関する研究	1,170
新規	特別研究員奨励費	松岡佐知	高齢期の人間にとっての居住型宗教施設の役割:南インドの事例から	1,430
			計6件	7,930
			総計64件	279,390

地域研究画像デジタルライブラリ(DiPLAS)

この事業は、地域研究に関わる進行中の科学研究費助成事業プロジェクトを対象とし、過去に蓄積された画像資料のデジタル化・共有化が大きな貢献をなすものを技術的に支援し、研究の格段の進展を促すことを目的としています。この事業を通じて、日本の国内外での学術調査に関わる写真・動画資料を集積したデータベース「地域研究画像デジタルライブラリ」を構築し、地域研究のさらなる発展に資するプラットフォームとして整備します。

また、国立民族学博物館を中核機関とし、京都大学東南アジア地域研究研究所、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、東京大学東洋文化研究所、国立情報学研究所を連携機関として推進しています。



受託研究 平成29年度

研究代表者	委託者	研究課題	研究費(千円)
野林厚志	台湾文化部	台湾文化光点計画事業—台湾の飲食文化を学ぶ	771
森 明子	日本学術振興会（学術動向調査）	文化人類学・民俗学分野に関する学術研究動向—現代世界の諸問題の人類学化	1,690
松尾瑞穂	日本学術振興会 （二国間交流事業共同研究／セミナー）	近代マハーラーシュトラにおけるカースト観の構築	1,152
		計3件	3,613

寄附金等による研究活動 平成29年度

寄附金の名称	研究代表者	寄附者	受入額(千円)
菊澤律子准教授研究助成金 りそなアジア・オセアニア財団	菊澤律子	菊澤律子	1,000
外来研究員井家晴子研究助成金 住友生命 未来を強くする子育てプロジェクト スマセイ女性研究者奨励賞	井家晴子	井家晴子	1,000
早川真悠外来研究員研究助成金 (公益信託 澁澤民族学振興基金)	早川真悠	早川真悠	200
順益台湾原住民博物館研究賛助金	野林厚志	順益台湾原住民博物館	2,800
日本カナダ学会年次研究大会運営助成金	岸上伸啓	日本カナダ学会	200
荘司一步研究助成金 (高梨学術奨励基金 若手研究助成)	荘司一步	荘司一步	450
八木百合子機関研究員研究助成金 (公益財団法人日本科学協会 海外発表促進助成)	八木百合子	八木百合子	270
伊藤渚外来研究員研究助成金 (公益信託 澁澤民族学振興基金)	伊藤 渚	伊藤 渚	500
国立民族学博物館 活動助成金	国立民族学博物館	イカリ消毒株式会社	50
国立民族学博物館 活動助成金	国立民族学博物館	立命館大学	20
国立民族学博物館 活動助成金	国立民族学博物館	尾川文彦	100
国立民族学博物館 活動助成金	国立民族学博物館	神戸親和女子大学	10
国立民族学博物館 活動助成金	国立民族学博物館	学校法人神奈川大学	30
国立民族学博物館 活動助成金	国立民族学博物館	柴田 仁	10
国立民族学博物館 活動助成金	国立民族学博物館	学校法人 龍谷大学	10
国立民族学博物館 活動助成金	国立民族学博物館	日本液炭株式会社	30
荘司一步研究助成金	荘司一步	荘司一步	108
		計17件	6,788

手話言語学研究部門 平成29年度

手話言語学研究の推進と研究成果の諸大学や社会発信のためのアウトリーチ、および、手話手話通訳者養成を通してろう聴の研究者が協働して研究を進めるための基盤づくりにとりくむことを目的に設置されました。現在、併任1、専任3、事務補佐員4、国内客員2、外来研究員1の計11名（うち、ろう者は3名）で手話言語学の研究、通訳養成、社会発信やアウトリーチ活動、手話を含む言語展示の企画等を進めています。

助成金の名称	助成者	助成期間	助成額(千円)
手話言語学研究部門の設置および手話言語学事業の推進	日本財団	平成29年4月～平成30年3月	37,000

文化資源関連事業・情報関連事業

文化資源プロジェクト・情報プロジェクト

「文化資源プロジェクト・情報プロジェクト」は、本館専任教員の提案に基づき、本館あるいは大学等関連諸機関が所有する学術資源の体系化および情報化をすすめ、本館専任教員のイニシアティブにより共同利用を促進し、学術的価値を高めるために、機関として実施する研究プロジェクトです。「文化資源プロジェクト」では、調査・収集分野、資料管理分野、展示分野、博物館社会連携分野の4分野のプロジェクトを実施しています。また、「情報プロジェクト」では、取材・収集分野、情報化分野の2分野のプロジェクトを実施しています。

平成30年度文化資源プロジェクト一覧

分野	提案者	プロジェクト名
調査・収集	寺田吉孝	インド民俗絵画カリガートの購入
展示	野林厚志	特別展「太陽の塔からみんぱくへー70年万博収集資料」
展示	日高真吾	特別展「工芸継承－東北発、日本インスタリアルデザインの原点と現在」
展示	笹原亮二	特別展「子ども・誕生ーモノからみる子どもの近代」(仮称)
展示	鈴木七美	企画展「アーミッシュ・キルトを訪ねてーそこに暮らし、そして世界に生きる人びと」
展示	寺田吉孝	企画展「旅する楽器ー南アジア、弦の響き」
展示	池谷和信	巡回展「ビーズーつなぐ、かざる、みせるー」
展示	池谷和信	国立民族学博物館コレクション 貝の道
展示	池谷和信	ビーズー国立民族学博物館コレクションからー
展示	山中由里子	特別展「超自然史博物館ー驚異と怪異の世界へー」(仮称)準備
展示	菊澤律子	特別展「おしゃべりなヒト」(仮称)準備
展示	西尾哲夫	沙漠のムスリム女性の暮らしと半世紀の変容に関する企画展
博物館社会連携	信田敏宏	知的障害者の博物館活用モデル構築に関する実践的研究

平成30年度情報プロジェクト一覧

分野	提案者	プロジェクト名
取材・収集	三島禎子	みんぱく映像民族誌「ソニンケ民族文化祭」の制作
取材・収集	山中由里子	みんぱく映像民族誌「怪異の音の民族誌ー異界との接点で聞こえてくるもの」(仮題)制作
取材・収集	川瀬 慈	エチオピア、ティグレイ州の女性の門付け儀礼「アシェンダ」の映像民族誌制作
取材・収集	南 真木人	ネパールの楽師カースト・ガンダバに関する映像資料制作
取材・収集	寺田吉孝	映像番組「アリアン峠を越えていくー在日コリアンの音楽」の英語版、韓国語版の制作
情報化	佐藤浩司	三次元CGを利用した民族建築デジタルアーカイブの構築

文化資源計画事業・情報計画事業

「文化資源計画事業・情報計画事業」は、本館の共同利用基盤を整備・強化することを目的として、継続性の高い事業、または計画的に実施する事業です。

「文化資源計画事業」では、資料関連分野、展示分野、博物館社会連携分野の3分野の事業を実施しています。また、「情報計画事業」では、記録映像制作分野、展示情報化分野の2分野の事業を実施しています。

平成30年度文化資源計画事業一覧

分野	実施責任者	事業名
資料関連	日高真吾	標本資料の撮影等業務
資料関連	企画課長	研究資料整理・情報化及び利用管理業務【標本資料関連】
資料関連	日高真吾	研究資料整理・情報化及び利用管理業務【データベース関連】
資料関連	園田直子	有形文化資源の保存・管理システム構築
展示	企画課長	「知をデザインするー特別展にみる世界の25年 民博の25年」の改修
展示	鈴木 紀	コレクション展示 新着「メキシコのアルテ・ポプラル新着資料展」
展示	丹羽典生	年末年始展示イベント「干支展」
博物館社会連携	樫永真佐夫	ボランティア活動支援
博物館社会連携	樫永真佐夫	ワークショップの実施ならびにワークシートの運用
博物館社会連携	樫永真佐夫	音楽の祭日2018 in みんぱく
博物館社会連携	川瀬 慈	みんぱく「エチオピア、アムハラ州の装い」(仮題)の制作
博物館社会連携	齋藤玲子	カムイノミ及び「アイヌ古式舞踊」演舞の実施
博物館社会連携	樫永真佐夫	みんぱくの改訂版制作

平成30年度情報計画事業一覧

分野	実施主体	事業名
展示情報化分野	三島禎子	ビデオテーク番組「ソニンケの民族文化祭」他2本の制作
記録映像制作分野	情報運営会議	特別展・企画展パノラマ映像制作
記録映像制作分野	情報運営会議	研究公演記録映像制作

(全て平成30年4月1日現在)

各個研究 平成30年度各個研究課題

館長

吉田憲司 文化の創造・継承と表象に関する博物館人類学的研究

人類基礎理論研究部

飯泉菜穂子 学術手話通訳者養成の実践とカリキュラムの検討および検証
川瀬 慈 コミュニケーションを媒介し生成する民族誌映画の研究
菊澤律子 フィジー諸言語の発達史研究における地理情報システム(GIS)の応用

相良啓子 日本手話と台湾手話における歴史変化の解明：歴史社会言語学的方法論の確立に向けて

園田直子 持続可能な資料管理に向けた取蔵庫再編成
出口正之 トランスフォーマティブな非営利研究サイバー空間のフィールドワーク

日高真吾 日本列島における地域文化の再発見とその表象システムの構築
福岡正太 映像音響メディアが伝統的音楽芸能に与える影響に関する研究
丸川雄三 連想情報学に基づく文化情報発信に関する研究
八木百合子 現代アンデス地域における宗教的なモノの所有と継承に関する人類学的研究

山本泰則 博物館資料・情報・展示の関係性について
吉岡 乾 北パキスタン諸言語の記述言語学的研究

超域フィールド科学研究部

宇田川妙子 公共性と親密性の再検討と再編
太田心平 韓国・朝鮮における社会文化の統合性と多様性
樫永真佐夫 ベトナムにおける黒タイ文字と文書
東南アジアにおけるボクシングの文化人類学

韓 敏 社会、歴史と象徴に関する超域フィールドの研究
小長谷有紀 調査記録写真の分析による地域像の再構築—モンゴル高原へのエクスペディション

新免光比呂 ルーマニアの社会主義体制下での知識人について

菅瀬晶子 東地中海アラブ諸国における宗教的アイデンティティの表象
丹羽典生 応援の人類学：政治・スポーツ・ファン文化からみた利他性の諸相
MATTHEWS, Peter J. 東南アジアにおけるサトイモの遺伝的多様性のマッピングによる栽培化モデルの検証
政治的及び地理的に隔離された少数民族独自生存圏での植物遺伝資源及び伝統知の賦存
民博所蔵「朝枝利男コレクション」のデータベースの構築—オセアニア資料を中心に

松尾瑞穂 南アジアにおけるリプロダクションとサブスタンスの変容に関する研究

人類文明誌研究部

池谷和信 狩猟採集民からみた地球環境史
上羽陽子 現代インドの手工芸文化に関する民族芸術学的研究
卯田宗平 鶴飼文化の比較研究

齋藤 晃 植民地期アンデスにおける副王トレドの総集住化の総合的研究
鈴木 紀 現代ラテンアメリカ文明の輪郭

關 雄二 古代アンデスにおける権力生成過程の研究
寺村裕史 古代シルクロード都市の形成ならびに人と文化の東西交流に関する研究

平井京之介 ポスト紛争期の水俣における「負の遺産」の生成過程に関する博物館人類学的研究

藤本透子 カザフスタンにおける社会・宗教・伝統医療の人類学的研究

グローバル現象研究部

相島葉月 現代エジプトにおける美と身体文化
河合洋尚 景観人類学および食景観(フードスケープ)の人類学的研究
環太平洋における客家の移動、文化再生、景観形成にまつわる越境民族誌

鈴木七美 超高齢社会のエイジフレンドリー・コミュニティ—世代間コミュニケーションと学びにむけて

西尾哲夫 グローバル化と中東地域の民衆文化

信田敏宏 東南アジアの文化に関する人類学的研究
インクルーシブ社会に関する人類学的研究

廣瀬浩二郎 「バリア・フリー」に関する人類学的研究
三尾 稔 インド西部における宗教と文化の変容に関する人類学的研究

三島禎子 アフリカ商業民の財の形成と継承に関する文化人類学的研究
南 真木人 ネパール地震後の社会再編に関する研究

森 明子 社会的なものの意味と通文化的普遍性に関する人類学研究

学術資源研究開発センター

飯田 卓 アフリカにおける有形遺産のインタンジビリティと無形遺産のマテリアリティ

伊藤敦規 日本国内博物館等所蔵アメリカ先住民資料の協働管理に向けた調査研究

岸上伸啓(併) 北アメリカ先住民社会における捕鯨の歴史と現状に関する比較研究

齋藤玲子 アイス文化の継承と社会的背景の研究
笹原亮二 民俗文化としての子どものおもちゃと遊びの諸相

佐藤浩司 東南アジア木造建築史の再構築
寺田吉孝 映像音響メディアの特質と活用の可能性の再検討
南アジア弦楽器の伝播と変容

野林厚志 生態資源獲得の道具と技巧の人類学的研究
林 勲男 災害の想起における媒体の役割—遺構・モニュメント・語り継ぎ

山中由里子 驚異と怪異の比較文明論：想像界と自然界の相関

研究成果の公開 ※開催場所の表記がないものは、本館で開催。外国語表記があるものは、国際研究会。

本館では、館長リーダーシップ経費「研究成果公開プログラム」をはじめ、シンポジウムや研究フォーラム、国際研究会への派遣など、研究成果の公開を積極的に支援しています。その他の外部資金等を含め、平成27年度は下記のような成果公開を実施しました。なお、機関研究関連については、10～11頁に掲載しています。

学術講演会

先端的な研究活動を取りあげ、その成果を社会に積極的に還元するとともに、文化人類学・民族学を通じての異文化理解と、広く本館が学術研究機関であることの認識を一般市民に深めてもらうことを目的として、東京と大阪において学術講演会を実施しています。

みんな公開講演会
料理と人間—
食から成熟社会を問いなおす

平成29年11月17日
講師 中嶋康博、宇田川妙子、野林厚志
司会 福岡正太
参加総数 407名
共催 日本経済新聞社



みんな公開講演会
'70年万博からみんなへ

平成30年3月23日
講師 吉田憲司、石毛直道、ヤノベケンジ
司会 菅瀬晶子
参加総数 349名
共催 毎日新聞社



シンポジウム等

国際シンポジウム
「カナダ先住民の歴史と現状」
"History and Current Situations of
Indigenous Peoples in Canada"

平成29年9月9日
代表者 岸上伸啓
経費 研究成果公開プログラム
参加者数 165名



国際シンポジウム
「地域文化の再発見
—大学・博物館の視点から」
"Symposium"

平成29年10月21日～10月22日
代表者 日高真吾
経費 研究成果公開プログラム
参加者総数 215名



国際シンポジウム
「手話言語と音声言語に関する
民博フェスタ2017」
"Signed and Spoken Language Linguistics"

平成29年9月22日～24日
代表者 菊澤律子
経費 日本財団手話言語学研究部門
参加者総数 270名



国際シンポジウム
「無形文化遺産をめぐる交渉」
"Negotiation Intangible Cultural Heritage"

平成29年11月29日～12月1日
代表者 福岡正太
経費 研究成果公開プログラム
参加者総数 47名



国際シンポジウム
「変容する世界のなかでの
文化遺産の保存」
"Preservation of Cultural Heritage
in a Changing World"

平成29年10月7日～10月8日
代表者 園田直子
経費 研究成果公開プログラム
参加者総数 156名



公開フォーラム
「世界の博物館2017」
"Museums in the World 2017"

平成29年11月3日
代表者 新免光比呂
経費 JICA課題別研修
「博物館とコミュニティ開発」
参加者数 82名



研究成果の出版 平成29年度

館内の出版物

国立民族学博物館研究報告

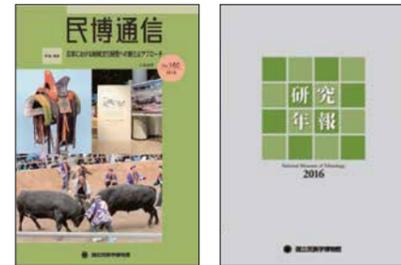
- 42巻1号 **論文**
情報考古学的手法を用いた文化資源情報のデジタル化とその活用
寺村裕史
物質文化を「翻訳」する—国立民族学博物館における展示解説の多言語化実践現場から 山中由里子
研究ノート
オーストラリアの反捕鯨思想と人々の考える「理想的なオーストラリア」
前川真裕子
- 42巻2号 **論文**
なぜ宇治川の鶴飼においてウミウは産卵したのか—ウミウの捕獲作業および飼育方法をめぐる地域間比較研究 卯田宗平
ロマンティストであり、リベラリストである—「柳田国男」の自己創造
竹沢尚一郎
- 42巻3号 **論文**
北インドにおける婚嫁婚再考—ラージャスターン州西部に暮らすジョーギーの姻戚関係を事例に 中野歩美
資料
最近の狩猟採集民研究の動向—第11回国際狩猟採集民学会議(CHAGS11)に出席して 池谷和信・岸上伸啓・佐々木史郎・戸田美佳子
- 42巻4号 **論文**
エスニシティを可視化する手段としての衣服—台湾原住民族サキヤヤ族の民族認定を事例として 野林厚志
資料
Un document inédit à propos des ouvrages de François Pétis de La Croix (1653-1713) Tetsuo Nishio et Naoko Okamoto
Work Ethic in a Japanese Museum Environment: A Case Study of the National Museum of Ethnology Alex de Voogt, Shimpei C. Ota and Jonas W. B. Lang
「人種」と「人種主義」をめぐる博物館展示の動向—フランスの人類博物館とアメリカ人類学会の展示会の事例 亀井伸孝

民博通信

- 157号 **評論・展望**
社会的なものをいかに描くか—ケアが発動する場所への関心 森 明子
- 158号 **評論・展望**
文明の転換点における人類学と博物館—民博の開館40周年にあたって考える 吉田憲司
- 159号 **評論・展望**
アフリカにおける障害者の生活世界—その地域性と歴史性 戸田美佳子
- 160号 **評論・展望**
日本における地域文化研究への新たなアプローチ 日高真吾

国立民族学博物館研究年報2016

研究年報は、本館の研究部の年次活動を総論的に広報するために発行されています。研究活動にとどまらず、展示や社会連携など教員がかかわるすべての年次活動を網羅的に示し、広報し、自己点検・評価書に添付する資料としての役割も加わるようになっていきます。



Senri Ethnological Studies (SES)

- no. 95 *Sedentarization among Nomadic Peoples in Asia and Africa*, edited by Kazunobu Ikeya
- no. 96 *Structural Transformation in Globalizing South Asia: Comprehensive Area Studies for Sustainable, Inclusive, and Peaceful Development*, edited by Minoru Mio, Koichi Fujita, Kazuo Tomozawa and Toshie Awaya
人類学視野下的历史、文化と博物館—当代日本和中国の理論実践
韓敏・色音編
- no. 97 *Let's Talk about Trees: Genetic Relationships of Languages and Their Phylogenetic Representation*, edited by Ritsuko Kikusawa and Lawrence A. Reid

Senri Ethnological Reports (SER)

- 142号 中国における歴史の資源化の現状と課題 塚田誠之・河合洋尚編
- 143号 *How Do Biomedicines Shape People's Lives, Socialities and Landscapes?* edited by Akinori Hamada and Mikako Toda
- 144号 社会主义制度下的中国饮食文化与日常生活 河合洋尚・刘征宇編
- 145号 展覧会の研究「ラテンアメリカの音楽と楽器」展アンケート調査を中心として
山本紀夫著
- 146号 *Satawalese Cultural Dictionary*, compiled by Sabino Sauchomal, Tomoya Akimichi, Shuzo Ishimori, Ken'ichi Sudo, Hiroshi Sugita and Ritsuko Kikusawa, edited by Lawrence A. Reid



館外での出版物

- 文明史のなかの文化遺産 飯田 卓編 臨川書店
海民の移動誌—西太平洋のネットワーク社会
小野林太郎・長津一史・印東道子編 昭和堂
東南アジアのポピュラーカルチャー—アイデンティティ・国家・グローバル化
福岡まどか・福岡正太編 スタイルノート



29年度の受賞

第39回 サントリー学芸賞(思想・歴史部門)
左地亮子 機関研究員(2017.5.1~2018.3.31)
現代フランスを生きるジプシー—旅に住まうマヌーシュと共同性の人類学
世界思想社

学術資源研究開発センター

センターの設置目的

学術資源研究開発センターは、本館が所蔵する学術資源の学際的かつ国際的共同利用性を高度化することを目的として、平成29年4月1日に設置されました。

学術資源研究の開発

国立民族学博物館には、約34万点の標本資料や約7万点の映像・音響資料、約67万冊の書籍、本館の所蔵資料をはじめ、多様な研究資料や写真資料、研究成果に関連するデータベース、文化人類学者・民族学者が残したフィールドノートや調査資料からなる民族学研究アーカイブズ等があります。これらは人類の文化や活動に関わる文化資源であり、人類の過去、現在、そして未来を考えるための貴重な学術資源でもあります。本館では、これらの学術資源に関する研究成果や情報を「フォーラム型情報ミュージアム」とよばれるデータベースや、特別展・企画展・巡回展など多様な媒体を利用して公開するなど、学術資源の共同利用性を学際的かつ国際的に高めるプロジェクトを実施しています。本センターでは、これらの研究プロジェクトを支援するとともに、新たに立案し、推進します。

平成29年度成果

平成29年度には、「人類の文化資源に関するフォーラム型情報ミュージアム構築」プロジェクトの開発型プロジェクト4件と強化型プロジェクト7件の推進を支援するとともに、特別展「ビーズつなぐ・かざる・みせる」と「よみがえ！ シーボルトの日本博物館」、企画展「カナダ先住民の文化の力—過去、現在、未来」と「現れよ。森羅の生命—木彫家 藤戸竹喜の世界」、巡回展「イメージの力—国立民族学博物館コレクションにさぐる」などの準備と開催を支援しました。また、学術資源の共同利用性の高度化のための研究を実施しました。

平成30年度事業

平成30年度には、おもに3つの事業を展開します。

フォーラム型情報ミュージアム構築プロジェクトの研究推進と支援

本館では、平成28年度より人間文化研究機構の機関拠点型基幹研究プロジェクト「人類の文化資源に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築」を実施しています。平成30年度には、「アイス資料」や「北東アジア資料」など4件の開発型プロジェクトと「中南米資料」や「中東資料」など5件の強化型プロジェクトを実施します。本センターでは、標本資料名の統一化・多言語化などについて研究するとともに、データベースの構築や編集、発信などに関して各プロジェクトの推進を支援します。

特別展・企画展・巡回展プロジェクトの研究推進と支援

本館では、学術資源やそれらに関連する研究成果を公開するために、特別展や企画展、巡回展を実施しています。平成30年度には、特別展「太陽の塔からみんなばくへー70年万博収集資料」、「工芸継承—東北発、日本インダストリアルデザインの原点と現在」、「子ども・誕生—モノからみる子どもの近代」(仮称)や企画展「アーミッシュ・キルトを訪ねて—そこに暮らし、そして世界に生きる人びと」、「旅する楽器—南アジア・弦の響き」、巡回展「ビーズつなぐ・かざる・みせる」などを実施します。本センターでは、これらの展示をおこなうための研究を進めるとともに、実施するための支援をおこないます。

学術資源の共同利用性の高度化に関する研究

平成30年度には、いかにすれば本館の学術資源の学際的・国際的な共同利用化が進展し、大学教育や学術研究、知識の一般社会への普及、文化の担い手による文化の創成等に効果的に貢献できるかについて研究します。

国際研究統括室

設置目的

国際研究統括室は、各研究部ならびにセンターによる組織的研究力を強化し、共同利用・共同研究の面での機能強化を図るために、旧研究戦略センターと旧国際学術交流室が担ってきた国内および海外との共同研究・共同利用に係る研究戦略機能を統合的に引き継ぎ、新領域の開拓のための共同利用型研究体制の基盤整備及び国際・国内戦略を立案し統括することを目的として、平成29年4月に設置されました。具体的には、共同利用型研究プロジェクトの実施体制の改善、学術交流協定(国内外)締結方針の策定と締結、海外研究動向調査、外部資金に関する情報収集と情報提供など、本館がより戦略的かつ組織的に国際的な研究連携や共同研究を推進していくために必要な活動をおこなっています。

海外の研究機関との研究連携、研究協力の推進

研究連携や研究協力のために、海外の研究機関との学術協定について、調査・締結を進めています。平成29年度は、11月にイラン国立博物館と、12月に客家委員会客家文化発展センター、交通大学客家文化学院との間で学術協定を締結しました。



協定記念学術シンポジウムにおける協定書へのサイン

協定先機関名	協定締結日	協定の概要および平成29年度活動概要
客家文化発展センターおよび交通大学客家文化学院(台湾)	平成29年12月16日	国際共同研究、研究者の交流、博物館に関する資料や情報の交換など。29年度には、3者機関間における研究活動や博物館活動を促進・活性化させることを目的に協定が結ばれた。
イラン国立博物館(イラン・イスラム共和国)	平成29年11月8日	国際共同研究、研究者の交流、博物館に関する資料や情報の交換など。29年度には、両博物館における研究活動や博物館活動を促進・活性化させることを目的に協定が結ばれた。
ブリティッシュコロンビア大学 人類学博物館—UBC—(カナダ)	平成29年3月9日	研究交流、人材交流、データベース構築の協力など。29年度には、本館収蔵の北米北西海岸先住民関連資料に関するデータベースコンテンツをReciprocal Research Network (RRN)へ提供した。また、同大学の教授を招へいし、フォーラム型情報ミュージアムのデータベースの高度化および先住民をはじめとする異文化展示のあり方について共同研究を実施した。
浙江大学人類学研究所・図書館(中国)	平成28年4月19日	資料の寄贈、人材交流、共同研究など。29年度には、同大学の図書館の「民博文庫」に本館の主要刊行雑誌を寄贈した。
ヴァンダービルト大学(米国)	平成28年1月15日	国際共同研究、国際シンポジウムの開催など。29年度には、同大学と本館の共催による国際シンポジウムを開催するとともに、成果刊行のためのスケジュールを取り決めた。
国立台湾歴史博物館(台湾)	平成27年10月17日	共同研究、博物館展示協力など。29年度には、平成30年度開催予定の特別展「記録台湾」(仮称)の準備作業のため、同大学の研究者を招へいし、本館収蔵の内田アーカイブズの精査を実施した。
北アリゾナ博物館(米国)	平成26年7月4日	学術交流・研究の強化・発展。29年度には、ホビ製宝飾品資料のソースコミュニティとの熟覧調査の協働編集作業、資料調査を行うと共に、国際ワークショップを主催した。また、これまでに実施した資料熟覧調査の成果をまとめる作業を行っている。
文化省文化財保護局(マリ)	平成26年5月7日	マリの文化財の保護と研究、教育、普及に関する協力。
中国社会科学院民族学・人類学研究所(中国)	平成24年8月28日	学術交流ならびに研究プロジェクトや研究資料、学術情報及び公開出版物の交換と相互利用の展開など。29年度には、これまでに実施した国際シンポジウムの成果を論文集にまとめ、多言語による研究成果の発信と刊行出版に努めた。
国立博物館(フィリピン)	平成24年7月18日	共同研究、研修、出版、展示等のプロジェクトにおける学術的な研究および交流の促進など。29年度には、植物サンプルの分析について共同研究を実施。また、国際学術交流協定の更新を行った。
アシウィ・アワン博物館・遺産センター(米国)	平成24年6月3日	学術協力、共同研究のプロジェクトの展開、博物館資料の展覧および教育分野における協力活動など。29年度には、これまでの国際ワークショップに関する成果報告の出版に向けた準備を行った。
ベトナム生態学生物資源研究所(ベトナム)	平成24年3月22日	共同研究、研修、出版、展示等のプロジェクトにおける学術的な研究および交流の促進など。29年度には、共同フィールドワークを実施し、植物サンプルの収集・分析を行った。
ロシア科学アカデミー・ビョートル大帝記念人類学民族学博物館(クンストカメラ)(ロシア)	平成23年10月21日	学術・文化の両分野における相互交流および協力関係を発展など。29年度には、中央・北アジアの諸民族に関する意見交換を進めてきた成果に基づき、本館展示場中央・北アジア展示の部分改修を行った。

ロシア民族学博物館(ロシア)	平成22年12月3日	博物館学、調査研究、文化財保護の各分野における協力と相互支援の推進など。29年度には、中央・北アジアの諸民族資料に関するSESおよびSERの刊行に向けて編集作業を行った。
エジンバラ大学(英国)	平成22年5月17日	学術交流ならびに共同的研究事業の促進など。29年度には、両機関が協力して刊行予定の英文研究業績集の編集が行われた。また、本館から研究者を派遣する計画についての調整を行っている。
国立台北芸術大学(台湾)	平成21年5月15日	相互の学術交流、研究プロジェクトの展開、博物館展示・教育活動に関する協力、学術情報・出版物の交換など。29年度には、博物館専門人材育成を目的とした国際フォーラムを台湾および本館にて開催した。また、来年度の国際フォーラムについての準備を行った。
内蒙古大学(中国)	平成20年9月22日	双方の教職員・研究者の交流・研究プロジェクトの展開、博物館展示・教育分野における協力、学術資料・出版物の交換など。29年度には、満洲国時代の画像史料のモンゴル関係の史料に関する解説に協力した。また、北東アジア地域研究シンポジウムの企画への協力、東部モンゴルの記録からは日本との文化交流に関する資料の収集分析を行った。
韓国国立民俗博物館(韓国)	平成19年7月11日	研究者交流、共同研究、研究集会の実施、博物館展示・教育活動に関する協力、学術情報・出版物の交換など。29年度には、国際共同展示・映像制作など。同大学に本館教授が招へいされ、漁民に関する共同調査を実施した。
順益台湾原住民博物館(台湾)	平成18年7月1日	共同研究、博物館展示協力など。29年度には、台湾および本館において学術研究会を開催した。また、学術刊行物「台湾原住民研究」21号を出版した。
国立サン・マルコス大学(ペルー)	平成17年6月14日	考古学分野における共同研究員調査の遂行、ならびにそれに基づく学術交流を促進すること。29年度には、パコパンバ遺跡の学術調査の共同実施、国立サン・マルコス大学の学部学生の指導、発掘の成果について第18回ラテンアメリカおよびカリブ海地域国際研究所連盟会(FIEALC2017)、ペルー考古学会議および古代アメリカ学会で発表した。

みんぱくフェローズ

これまで本館と関わりのあった海外の研究者、および本館と関連の深い国内外の研究機関を「みんぱくフェローズ」として位置づけ、そのネットワークを構築しています。ネットワーク内の情報交換の手段として、英文のニューズレター(MINPAKU Anthropology Newsletter)を年2回発行し、交流を促進しています。「みんぱくフェローズ」として約1,200件が登録されています。



MINPAKU Anthropology Newsletter

フェローズ地域別一覧 平成30年3月31日現在

地域	
アジア・中東・オセアニア	685
ヨーロッパ	176
北米・中南米	220
アフリカ	68
合計	1,149

国内の研究機関等との研究連携、協力の推進

国内の大学等の研究機関や学会とも研究連携や協力、共同研究等の推進のため、学術協定を締結しています。平成29年度は、6月に大妻女子大学、2月に山形大学、3月に大阪大学、京都造形芸術大学との間で協定を締結しました。

協定先機関名	協定締結日	協定の概要
京都造形芸術大学	平成30年3月19日	学術研究、教育及び社会の発展への寄与。
大阪大学	平成30年3月17日	学術研究、教育、社会貢献及びその他諸活動の発展への寄与。
山形大学	平成30年2月16日	学術研究、教育及び社会の発展に貢献。
大妻女子大学	平成29年6月20日	学術研究、教育及び社会の発展への寄与。
神戸大学大学院人文学研究科	平成28年7月15日	研究教育のための学術交流。
東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所	平成27年11月25日	世界諸地域の言語と文化に関する学術研究、連携協力。
株式会社海遊館	平成27年11月19日	産学連携の推進、学術研究の振興、研究成果による社会貢献、連携協力。
追手門学院大学	平成27年4月22日(平成30年4月21日終了)	地域文化の継承と創造に関する学術研究、連携協力。
大阪工業大学	平成27年3月23日	情報メディア・デジタルコンテンツに関する学術研究、連携協力。
立命館大学	平成26年4月10日	食に関する学術研究、連携協力。
金沢大学	平成26年3月23日	両機関間の連携・協力の実績を基盤に、緊密かつ組織的な体制強化。
日本国際理解教育学会	平成25年3月28日(平成29年9月26日終了)	研究連携、研究交流、相互の研究成果の活用促進。人類社会における学術の発展と普及への寄与。
日本文化人類学会	平成20年2月27日	研究連携、研究交流、相互の研究成果の活用促進。人類社会における学術の発展と普及への寄与。

大学生・教員のためのみんぱく活用

研究の成果、展示物や所蔵資料、文化・学術情報、施設などを大学の教育と研究にひろく活用していただくための制度を設けています。

展示場の利用

教員同伴のもと、大学の講義・セミナーおよび公式行事(例:新入生オリエンテーション等)で展示場を利用する場合、事前申請をすれば観覧料が無料となります。

見学に教員が同行しない場合、または専門学校及び専修学校(専門課程に限る)の授業で見学する場合、シラバス等、授業内容が明記された資料を提示すると、割引料金で観覧できます。



展示場の利用

図書室の利用

文化人類学・民族学を中心とした文献図書資料が約67万点。

大学の授業等での図書室見学も受けつけています。

標本資料の利用

世界中から収集した標本資料が約34万点。

大学における教育や研究目的で利用する場合、利用料は無料です。



データベースの利用

映像・音響資料の利用

みんぱくが制作したものなど、世界各地の映像・音響資料が約7万点。

約770あるビデオテープ番組はDVDで視聴できます。

データベースの利用

所蔵資料や、研究資料・成果の膨大な情報が自由に検索できます。



若手研究者の育成

若手研究者の育成

若手研究者による本館における共同利用を促進するため、「みんぱく若手研究者奨励セミナー」を開催しています。セミナーでは、本館教員による基調講演のほか、参加者による発表と討論を2日間の日程でおこないます。また、若手を対象とした各種共同利用制度や施設紹介の一環として図書館や収蔵庫見学も実施します。

平成29年度利用実績 111件3,179名(無料利用)



※大学・短大等からの団体入館者件数

上田女子服飾専門学校(148)、追手門学院大学(289)、大阪学院大学(66)、大阪教育大学(89)、大阪芸術大学(72)、大阪芸術大学短期大学(135)、大阪成蹊大学(92)、大阪大学(102)、関西学院大学(58)、関西大学(102)、京都精華大学(185)、京都造形芸術大学(151)、京都橘大学(229)、甲南大学(87)、神戸女学院大学(185)、神戸女子大学(86)、摂南大学(74)、専門学校ヒコ・みづのジュエリーカレッジ大阪(82)、東京大学(56)、東北学院大学(61)、奈良大学(81)、日本理工情報専門学校(205)、文化服装学院(200)、桃山学院大学(83)、大和大学(78)、龍谷大学(337)
(以上、国内1団体50人以上)などから、117団体5,033人

設置目的

本館は、民族資料や文化財、博物館資料を対象に、一次的な非破壊分析や材質分析がおこなえる非破壊実験・材質分析装置システムを所有しています。共同利用型科学分析室は、非破壊実験・材質分析装置システムを文化人類学やその周辺領域の学問分野において、さまざまな組織や研究者がより積極的に活用でき、科学的研究に基づいた共同利用の促進に資することを目的として、平成29年12月に設置されました。

所有機器

X線透視CTスキャン装置

三次元積層造型機(3Dプリンター)

三次元形状計測装置

パイロライザーガスクロマトグラフ質量分析装置

イオンクロマトグラフ質量分析装置

蛍光X線分析装置

恒温恒湿槽

利用について

非破壊実験・材質分析装置システムの利用については、企画課標本資料係で受けつけています。

企画課標本資料係

TEL 06-6878-8392

FAX 06-6878-8242

Mail hyohons@idc.minpaku.ac.jp



X線透視CTスキャン装置



三次元積層造型機(3Dプリンター)



恒温恒湿槽

資料・情報の整備と社会還元

本館では、文化人類学・民族学を核とする諸分野の資料や情報を集積・整備して国内外研究者の共同利用に供するとともに、展示や各種事業などを通じて研究成果の社会還元をおこなっています。そのために、資料の収集、管理、情報整備、データベースとコンテンツの制作、展示、各種事業への展開の方法についても研究を重ねています。

情報管理施設は、これらの活動を支援するために設けられた附属施設です。

資料とデータベース



諸資料の所蔵一覧 平成30年3月31日現在

標本資料(未登録資料含む)	343,738点
海外資料	178,979点
国内資料	164,749点
映像・音響資料	70,850点
映像資料	8,199点
音響資料	62,651点

文献図書資料	
図書(製本雑誌含む)	675,527冊
日本語資料	264,444冊
外国語資料	411,083冊
雑誌	17,099種
日本語雑誌	10,129種
外国語雑誌	6,970種

HRAF Human Relations Area Files	
地域(民族集団)ファイル	385ファイル
原典(テキスト)	7,141冊

※現在はwebデータベースとして提供
 eHRAF World Cultures
 地域(民族集団)ファイル：307ファイル 原典(テキスト)：5,781点 676,468頁
 eHRAF Archaeology(先史時代など考古学的な文献データベース)
 地域(民族集団)ファイル：98ファイル 原典(テキスト)：2,370点 149,378頁
 (平成28年11月現在)

データベース一覧 平成30年3月31日現在

本館の所蔵資料をはじめ、さまざまな研究資料や研究成果をデータベース化し、館内外に広く提供しています。なお、民族学研究アーカイブズについては30頁に掲載しています。(※印は、館内でのみ利用できるデータベース。各データベースの〔〕内の数値は収録レコード数。)

標本資料

標本資料目録

本館が所蔵する標本資料(生業や生活、儀礼、製作技術にかかわる用具類など)の情報(画像あり)。ほぼすべての資料について、標本名、地域、民族、寸法・重量、受入年度などの基本情報を収録。 [285,122件]

標本資料詳細情報

本館が所蔵する標本資料(生業や生活、儀礼、製作技術にかかわる用具類など)の情報(画像あり)。標本名、現地名、訳名、収集地、使用地、使用民族、使用年代、用途・使用法、製作地、製作法・材料など、より詳しい情報を収録。 [館内公開：264,460件(内インターネット公開：69,713件)]

標本資料記事索引

本館関連出版物に掲載された所蔵標本資料の解説について、その書誌事項を標本資料別に整理したデータベース。 [62,523件]

韓国生活財

ソウルの李さん一家の生活財を網羅した情報。アパートの中にあつたすべての物について、配置と入手方法、物にまつわる家族の思い出を記録(画像あり)。 [7,827件]

ジョージ・ブラウン・コレクション(日本語版、英語版)

宣教師であり神学博士でもあったジョージ・ブラウン氏が19世紀末から20世紀初頭にかけて南太平洋諸島で収集し、現在、本館に収蔵されている民族誌資料の基本情報(画像あり)。 [2,992件]

カナダ先住民版画*

本館が所蔵する代表的なカナダ先住民版画の基本情報と解説(画像あり)。特別展「自然のこえ命のかたち—カナダ先住民の生み出す美」(2009年)の展示資料を中心に収録。 [158件]

映像・音響資料

映像資料目録

本館が所蔵する映画フィルム、ビデオテープ、DVDなど映像資料の情報。 [8,199件]

ビデオテーケ

本館展示場で提供しているビデオテーケ番組の情報。番組をキーワードで検索したり、ビデオテーケブースと同じメニューから探すことができる。 [775件]

音楽・芸能の映像

本館が世界各地で取材したビデオ映像から、音楽演奏や芸能に係る部分を、1曲または1テーマごとに抽出した動画データベース。映像は館内限定公開。 [849件]

松尾三憲旧蔵絵葉書コレクション

松尾三憲(みのり)氏が、1919年から1923年までの海軍在職中に、訓練航海の途上訪れた現地で買い求めた絵葉書の情報(画像あり)。 [170件]

京都大学学術調査隊写真コレクション

「京都大学カララム・ヘンズークシ学術探検隊」(1955年)、「京都大学探検部トンガ王国調査隊」(1960年)、「京都大学アフリカ学術調査隊」(1961年～1967年)、および「第二次京都大学ヨーロッパ学術調査隊」(1969年)が撮影した写真の情報(画像あり)。 [館内公開：42,195件(内インターネット公開：22,361件)]

梅棹忠夫写真コレクション*

梅棹忠夫本館初代館長が、世界各地における調査研究活動の過程で撮影した写真の情報(画像あり)。 [35,481件]

オーストラリア・アボリジニ研究フィールド写真*

小山修三本館名誉教授が、1980年から2004年にかけて、オーストラリア・アボリジニ文化の調査で記録した、儀礼から風景までの多彩な写真の情報(画像あり)。 [7,999件]

朝枝利男コレクション*

朝枝利男氏が1930年代にアメリカの学術調査団に数回にわたり同行し撮影した、南太平洋の人々や動植物の写真の情報(画像あり)。 [3,966件]

西太平洋およびインド洋を中心とする海洋民族写真資料—

大島襄二写真コレクション

大島襄二氏が、1967年から1991年にかけてアジアやオセアニアなどの調査で撮影した写真の情報(画像あり)。 [館内公開：8,842件(内インターネット公開：7,889件)]

アフリカ カメルーン民族誌写真集—一端信行コレクション

一端信行本館名誉教授が1969年から90年代初頭にかけて行った、おもにアフリカのカメルーン共和国での民族学的調査の際に撮影した写真の情報(画像あり)。 [6,530件]

沖守弘インド写真(日本語版、英語版)

写真家沖守弘氏が1977年から1996年にかけてインド全域で撮影した、宗教・祭礼・民俗画・芸能・生活文化に関する写真の情報(画像あり)。 [館内公開：22,120件(内インターネット公開：21,971件)]

ネパール写真(日本語版、英語版)

「西北ネパール学術探検隊」(1958年)に参加した高山龍三氏(当時大阪市立大学大学院生)らがネパールで撮影した写真、および、同隊が収集し、現在本館に収蔵されている標本資料の情報(画像あり)。 [3,879件]

西北ネパール及びマナスル写真*

「西北ネパール学術探検隊」(1958年～1959年)が撮影した写真の情報(画像あり)。一部に「日本山岳会第一次マナスル登山隊」(1953年)科学班の写真(推定)を含む。本館に移管された旧文部省史料館資料の一部。 [620件]

タイ民族誌映像—精霊ダンス*

田辺繁治本館名誉教授が調査したタイの精霊ダンスの写真情報(画像あり)。精霊ダンスの系統、開催地域、祭主から写真群を閲覧できる。写真は調査報告(タイ語)とも関連づけられている。 [写真：10,082件 調査報告：41件]

東南アジア稲作民族文化総合調査団写真*

日本民族学協会が1957年から1964年にかけて三次にわたり東南アジアに派遣した調査団のうち、第一次調査団(1957年)と第二次調査団(1960年)が記録した写真の情報(画像あり)。 [4,393件]

焼畑の世界—佐々木高明のまなざし*

佐々木高明(本館元館長)が調査で撮影・記録した写真の中から、特に日本の焼畑に関するものを収録(画像あり)。 [454件]

音響資料目録

本館が所蔵するレコード、CD、テープなど音響資料の情報。 [62,651件]

音響資料曲目

本館が所蔵する音響資料について、音楽の曲単位、昔話の一話単位で収録した情報。 [351,802件]

文献図書資料

図書・雑誌目録(OPAC)

本館が所蔵する図書・雑誌資料(マイクロフィルムなどを含む)の書誌・所蔵情報。 [図書資料：626,578件 雑誌タイトル：17,099件]

梅棹忠夫著作目録(1934～)

著書・論文をはじめ本の帯の推薦文にいたるまで、梅棹忠夫本館初代館長のあらゆる著作を網羅した目録情報。 [6,667件]

言語資料

中西コレクション—世界の文字資料

世界のさまざまな文字で書かれた図書・新聞・手稿・標本などの資料に関する分析情報と書誌情報、文字サンプルの画像。これらの資料は、中西印刷株式会社・故中西亮氏が世界各地で収集。 [2,729件]

吉川「シュメール語辞書」

吉川守氏(広島大学名誉教授)が40年ほどの年月をかけて完成させた、シュメール語の研究ノート。親字33,450語をキーワードに検索・閲覧できる。 [キーワード：33,450語(40,596頁)]

Talking Dictionary of Khinina-ang Bontok(ボントック語音声画像辞書)

Lawrence A. Reid氏(ハワイ大学名誉教授)が編集した、フィリピン・ルソン島北部で話されるボントック語のキナン方言の辞書。語の派生関係、例文、音声・画像などのデータを結びつけたマルチメディア・データベース辞書。 [見出し語：7,637語]

日本昔話資料—稲田浩二コレクション

稲田浩二氏(当時京都女子大学教授)らのグループが、1967年から1978年にかけて日本各地29道府県で現地録音取材した日本昔話資料(446本のテープ・約190時間)の情報(音声あり)。音声は館内限定公開。 [3,696件]

rGyalrongic Languages(ギャロン系諸語)[英語、中国語]

長野泰彦本館名誉教授とMarielle Prins博士が編集した、中国四川省の西北部で話されるギャロン系諸語のデータベース(音声あり)。81の方言ないし言語それぞれについて、425または1200の語彙項目と200の文例を収録している。 [語彙：39,826語 文例：15,706件]

服装・身装文化資料

衣服・アクセサリー

本館が所蔵する衣服標本資料とアクセサリー標本資料の詳細分析情報、および関連フィールド写真の情報(画像あり)。 [27,701件]

身装文献

身装文化に関する雑誌記事、図書の索引情報。1)服装関連日本語雑誌記事(カレント)、2)服装関連日本語雑誌記事(戦前編)、3)服装関連外国語雑誌記事、4)服装関連日本語図書、5)服装関連外国語民族誌で構成。 [176,403件]

近代日本の身装電子年表

洋装がまだ日常に定着していなかった1868年(明治元年)から1945年(昭和20年)の日本を対象とした身装関連の電子年表。「事件」と「現況」、「その年の情景」、「回顧」、テキスト画像で構成される。当時の新聞記事と身装関連雑誌から情報を収録。 [11,908件]

身装画像—近代日本の身装文化

和装と洋装が拮抗していた1868年(明治元年)から1945年(昭和20年)までの日本を対象とした身装関連の画像データベース。当時の新聞小説挿絵、写真、図書の図版、ポスターなどから画像を収録。 [6,161件]

ファクト、他

国内資料調査報告集*

日本国内における、1)民具などの標本資料類の所在、2)伝統技術伝承者の所在、3)民族・民俗映像記録の所在、4)民族・民俗関係出版物の所在、に関する情報。本館が委嘱した国内資料調査委員による調査報告集(1980年～2003年)をデータベース化。 [21,373件]

3次元CGで見せる建築—東南アジア島嶼部の木造民家

佐藤浩司本館准教授が1981年以來調査してきた東南アジア各地の木造建築物の情報。民家の3次元CGから作成したgifアニメーションにより建築物内外を巡回して見ることができる。 [34地点 52棟]

津波の記憶を刻む文化遺産—寺社・石碑データベース

日本の沿岸部に残されている、地震や津波災害の記憶を伝える寺社や石碑、銘板などの情報(画像あり)。 [333件]

みんなく図書室の活動

利用案内 開室日時 月・火、木曜日～土曜日 10:00～17:00(入室は16:30まで)
*日曜日、祝日、水曜日および博物館休館日は閉室
利用資格 どなたでもご利用できます。貴重図書などの一部を除き、資料の貸出もできます。
貸出をご希望の方は、現住所・お名前を確認できるもの(免許証、学生証など)をご持参ください。

1. 教育・研究支援

本館が所蔵する文献図書資料は、専門性の高い蔵書構成となっています。マイクロフィルムリーダーを4台設置し、カラーコピー機での複写サービスもおこなっています。カウンターには司書資格を有するスタッフが常駐し、大学共同利用機関として、教育・研究活動の支援体制を整えています。



図書室カウンター

2. 国立情報学研究所を介した文献図書資料の目録情報公開を促進

平成29年度は世界39言語の図書を目録登録し、626,578冊が検索可能となりました。また、NACSIS-CAT(全国規模の総合目録データベース)への週及入力事業として、雑誌168タイトル、マイクロ資料5,450件(北米学位論文約4,859件、図書20件、新聞雑誌106タイトル571件)を登録しました。95%が入力済みとなりました。

3. 社会貢献など

一般利用者も館外貸出利用ができます。平成29年度の一般利用者の登録者数は204名、館外貸出冊数は1,850冊です。

4. 蔵書検索

本館が所蔵する文献図書資料はどなたでも、どこからでもパソコンや携帯電話から検索できるよう公開されています。平成29年度の館外からの検索回数は、パソコン503,342回、携帯電話で151,692回ありました。

学術情報リポジトリ

「みんなくリポジトリ」は、NII(国立情報学研究所)のJAIRO Cloud(共用リポジトリサービス)を利用して、館内出版物『Senri Ethnological Studies』、『国立民族学博物館調査報告(Senri Ethnological Reports)』、『国立民族学博物館研究報告』、『国立民族学博物館研究報告別冊』、『民博通信』等に加えて、外部で出版されたものうち、利用許諾が取得できた論文を随時公開しています。その数は、平成29年度末時点で約4,759コンテンツで、論文のダウンロード利用数は月平均約47,205件です。平成29年度は、館内出版物の論文にDOI(デジタルオブジェクト識別子)を付与し、永続的アクセスに必要な情報を提供できるようにしました。



雑誌コーナー

民族学研究アーカイブズの構築

梅棹資料室

本館では創設以来、文化人類学・民族学研究者の研究ノートや原稿、フィールドで作成した映像・録音記録などさまざまな資料を集積してきました。これらを活用すべく情報運営会議の下に設置された「アーカイブズ部会」により、平成29年度も継続してアーカイブズ資料の実態調査と目録作成及びデジタル化をおこないました。今後も作業を継続し、順次公開していくことを目指します。また、初代館長梅棹忠夫の残した、フィールドノート、スケッチ、写真、メモ、原稿、著作、書評など、知的生産の素材とそこから生産された多種多様な膨大なアーカイブズ資料を整備・保管する収蔵施設として、平成25年4月に「梅棹資料室」を設置しました。専属担当者(アーキビスト)が資料を分析・整理し、主に学術研究等に活用するための支援をおこなっています。



保存箱に収納されたアーカイブズ資料

- 青木文教(あおき ぶんきょう) アーカイブ
- 泉 靖一(いずみ せいいち) アーカイブ
- 岩本公夫(いわもと きみお) アーカイブ
- 梅棹忠夫(うめざお ただお) アーカイブズ
- 大内青純(おおうち せいじ) アーカイブ
- 沖 守弘(おき もりひろ) ・インド民族文化資料アーカイブ
- 桂米之助(かつら よねのすけ) アーカイブ
- 鹿野忠雄(かの ただお) アーカイブ
- 菊沢季生(きくざわ すえお) アーカイブ
- 杉浦健一(すぎうら けんいち) アーカイブ
- 土方久功(ひじかた ひさかつ) アーカイブ
- 馬淵東一(まぶち とういち) アーカイブ
- 「日本文化の地域類型研究会」アーカイブ

諸資料の利用

平成29年度

本館の所蔵する諸資料は、館内外における諸分野の研究や大学教育、他の博物館への貸付などを通し、社会還元されています。諸資料の利用に関するお問い合わせは、「民族学資料共同利用窓口」で受け付けています。平成29年度受付件数は、282件です。

民族学資料共同利用窓口

TEL・FAX 06-6878-8213

URL <http://www.minpaku.ac.jp/research/sharing/helpdesk>

1. 標本資料の貸付件数 10件 貸付資料数 631点

上記のうち、展覧会の展示点数全体における本館資料の貸付件数の占める割合が50パーセントを超えるものは、下記のとおりです。

貸付先	展覧会名	貸付資料	展覧会期間	貸付点数/全体の展示点数・貸付資料が展示資料に占める割合
堺市博物館	コーナー展示「祖先祭祀ーアジア諸国の祀り」	葬儀用具	平成29年8月1日～9月10日	26点/26点(100%)
石川県立歴史博物館	イメージの力ー国立民族学博物館コレクションにさぐる The Power of ImagesーThe National Museum of Ethnology Collection	仮面、衣類ほか	平成29年7月22日～9月3日	355点/359点(99%)
秋田県美郷町学友館	タイ王国文化展	壺杵、彫像ほか	平成29年10月1日～10月31日	169点/169点(100%)

2. 標本資料の特別利用(原板使用・写真撮影・熟覧)件数 106件 1,949点

上記のうち、大学関係21件(調査研究、著作の参考資料としての写真利用など)、博物館関係30件(調査研究、展示に係る写真利用など)

3. 映像・音響資料の利用件数 125件 貸出点数 902点

上記のうち、大学関係22件 304点、研究用(個人・研究会など)69件 389点

4. 文献図書資料

特別利用(原板使用・写真撮影)6件(うち調査研究、著作への写真使用など4件)
文献複写受付 4,025件(うち大学などの機関 1,658件)文献複写依頼 335件
現物貸借受付 660件(うち大学などの機関 496件)現物貸借依頼 505件

5. 研究アーカイブズ資料

閲覧件数 26件 特別利用 10件



標本資料収蔵庫

資料の保存

本館では、研究や展示などに使用する各種の学術資料を収集しています。資料の大半をしめる標本資料には、虫やカビの害を受けやすい有機素材が多く使われているため、資料の防虫・殺虫対策には特別な注意を払っています。たとえば海外からの新着資料には、収集地と日本の自然環境や生態系が大きく異なるため、燻蒸庫で薬剤による殺虫・殺菌処理をおこなっています。一方、日本国内に入ってから加害された資料には、できるかぎり薬剤を用いない殺虫処理法をおこなうなど、収集地や加害環境、材質の違いを考慮に入れながら殺虫処理法を使い分けています。このような本館特有の防虫・殺虫対策を有効に実施するため、平成19年に、大型のウォーク・イン高低温処理庫を新設するとともに、既存の燻蒸庫を、二酸化炭素処理や低酸素濃度処理もおこなえる多機能燻蒸庫に改修しました。また、燻蒸使用後の薬剤処理を目的に、触媒燃焼式の除害装置を設置することで、「ひとに、ものに、自然にやさしい」資料管理を実現しています。これらのシステムは、本館が、他大学などの研究者とともに資料の有効活用を支えるためにおこなっている保存科学研究の成果のひとつでもあります。



ウォーク・イン高低温処理庫



二酸化炭素処理や低酸素濃度処理もおこなえる多機能燻蒸庫

展示

展示の理念と構成

みんぱくにおける展示は、文化人類学・民族学とその関連諸分野の研究成果を多様なメディアを通じて社会に公開し、世界各地の文化についての認識を深めるとともに、文化の違いを超えた相互理解の場を提供することを目的としています。展示は、本館展示と特別展示・企画展示で構成されます。本館展示では、世界の文化の多様性と共通性についての広い理解が得られるよう、常設的な展示をおこなっています。一方、特別展示・企画展示は、特定のテーマについて深く掘り下げた内容の展示を、期間を限って、年に数回開催するものです。

本館展示

本館展示は、地域展示と通文化展示から構成されています。

地域展示では、世界をオセアニア、アメリカ、ヨーロッパ、アフリカ、それに日本を含むアジア各地域に分け、オセアニアを出発して東回りに世界を一周し、最後に日本にたどり着く構成をとっています。日本の文化を世界各地の文化との関連の中で理解できるように配慮したものです。みんぱくでは、創設以来、世界の民族文化に優劣はなく、すべて等しい価値をもつという認識にもとづいて、展示をつくり上げてきました。それぞれの文化に見られる違いは、人類の営みの豊かな多様性を示すものとして展示されています。また、世界の人びとの暮らしがよくわかるように、衣食住などの生活用品を中心とした展示になっているのも特徴のひとつです。

一方、通文化展示とは、地域単位でなく、特定のジャンルを取り上げて広く世界の民族文化を通覧する展示で、現在は音楽と言語についての展示を常設しています。

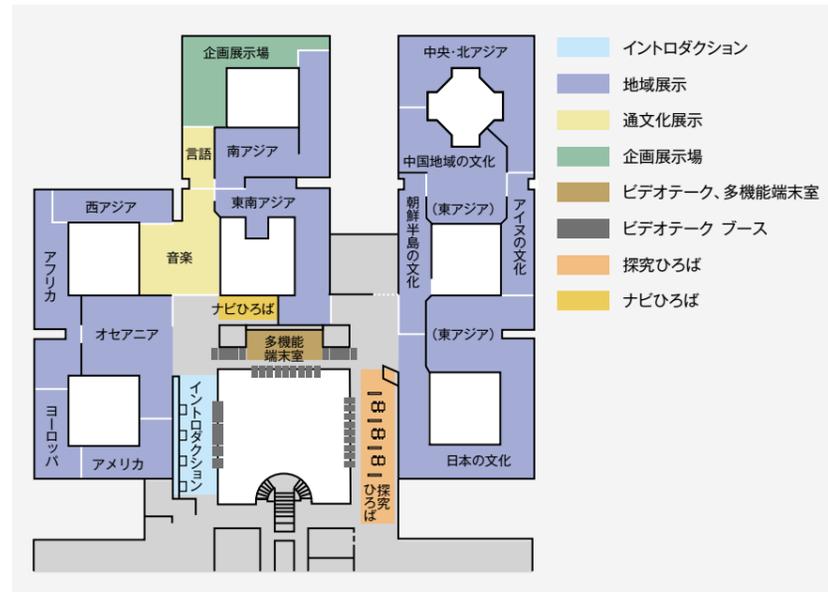
本館展示は、1977年の開館以来40年が経ち、世界の社会・文化的状況や学問のありかたなどが大きく変化していることにともない、平成20年度から展示の新構築を進めました。

その基本的な考え方は、以下の5点に要約できます。1. 国内外の研究者の力を結集する大学共同利用機能の活用。2. 展示に関わる三者、つまり展示をつくる研究者と展示の対象となる文化の担い手、そして展示の利用者が相互に交流・啓発して文化の違いを超えたフォーラムとしての展示の展開。3. 地域と世界や日本とのつながりとともに、文化が接触して変化する動態も示すグローバル展示への刷新。4. 情報提供の高度化や深化。5. 利用者の多様な要求にこたえる展示の実現。

平成21年3月にはアフリカ展示と西アジア展示、22年3月には通文化展示の音楽展示、言語展示と共同利用展示場、インフォメーションゾーンの一部(ナビひろば)、23年3月にはオセアニア展示とアメリカ展示、24年3月にはヨーロッパ展示とインフォメーションゾーン、25年3月には日本の文化展示のうち「祭り」と芸能」「日々の暮らし」、26年3月には朝鮮半島の文化展示、中国地域の文化展示、日本の文化展示のうち「沖縄の暮らし」「多みんぞくニホン」、27年3月には南アジア展示、東南アジア展示、28年6月には中央・北アジア展示、アイヌの文化展示が生まれ変わりました。本館展示場内に設けている企画展示場では、期間を限って、現代的な問題や最先端の研究成果など個別のテーマを取り上げた展示をおこなっています。この企画展示場は、国内外の大学等の最新の研究動向を迅速に展示に結びつける、共同利用展示場としても活用しています。

みんぱくでは、情報機器を活用した展示を積極的に展開しています。ビデオテークは、「映像情報自動送出装置」として、みんぱくが世界に先がけて開発したものです。約775本の映像番組を自分で選択して視聴することができます。その映像を通じて、本館展示場内で紹介されている民族の生活や、その民族が生み出したモノが実際に用いられている様子を確認することができます。一方、世界ではじめての映像と音声による携帯型の展示解説装置「みんぱく電子ガイド」は、平成19年度に新しいシステムに更新され、軽量化とともに、利便性が大幅に向上しました。

また、探究ひろばでは、情報検索端末を用いて展示資料に関するさまざまな情報を検索したり、比較したりすることができ、関連する書籍やみんぱくの刊行物を閲覧することもできます。



みんぱく電子ガイド
展示資料が、どのような場所で、どのような人びとによって、どのように使われているかを、映像と音声を使って解説する携帯型の展示解説装置です。日本語版、英語版、中国語版、韓国語版を用意しています。(平成29年度貸出件数: 7,844件)

地域展示

地域展示では、世界を大きくオセアニア、アメリカ、ヨーロッパ、アフリカ、西アジア、南アジア、東南アジア、中央・北アジア、東アジアの9地域に分けています。(各展示場名横の数字は展示場面積)

オセアニア 660㎡



移動と拡散 海での暮らし 島での暮らし 外部世界との接触 先住民のアイデンティティ表現

海がほとんどの面積を占めているオセアニアには、大小数万をこえる島々が点在しています。そこには、発達した航海術をもち、根栽農耕を営む人々が暮らしてきました。「移動と拡散」「海での暮らし」「島での暮らし」では、資源の限られた島環境で、さまざまな工夫をして生活してきた様子を展示しています。「外部世界との接触」「先住民のアイデンティティ表現」では、外の世界と出会うなかで、人びとが伝統文化をどのように継承、発展させてきたかを紹介しています。

ヨーロッパ 250㎡



生業と一年 宗教・信仰 産業化とともに 変動するヨーロッパ

ヨーロッパは、16世紀から20世紀にかけて、キリスト教や近代の諸制度をはじめ、さまざまな技術や知識を世界各地に移植しました。現代、この流れが逆転するなかで、世界中からの移民とともに、その文化も社会の一部となりつつあります。ここでは、時間の流れに注目しながら伝統的な生活様式と宗教、近代の産業化、さらに現代の新しい動きが層をなしてヨーロッパをつくりあげていることを示しています。

アメリカ 320㎡



出会う 食べる 着る 祈る 創る

広大なアメリカ大陸には、極地から熱帯雨林まで、さまざまな自然環境が見られます。人びとは、それぞれの環境に応じた生活を営んできました。一方で、ヨーロッパ人による征服と植民の歴史を経験したこの地には、日常生活の隅々まで、外来の文化が浸透していきました。ここでは衣、食、宗教に焦点をあて、アメリカ大陸の多様性と歴史の重なりを明らかにするとともに、土着の文化資源に現代的価値を見出そうとする芸術家や工芸家のすがたを紹介しています。

アフリカ 500㎡



歴史を振り起こす 憩う 働く 装う 祈る アフリカの今

人類誕生の地とされるアフリカは、常に外部世界と結びつきながら変化を重ねてきました。私たちが、現在目にするアフリカ大陸の中の、文化や言語の多様性は、そうした変化の結果にほかなりません。人びとの「歴史を振り起こす」営みに目を向けるとともに、現在のアフリカに生きる人びとの生活のありさまを「憩う・働く・装う・祈る」の4つのコーナーに分けて紹介しています。

西アジア 310㎡

信仰
砂漠の暮らし
パレスチナ・
ディアスポラ
日本人と中東
音文化と
ポップカルチャー



中東ともよばれる西アジアの人びとは、自分たちが暮らす地域をマシュリク(日出ずる地)とよび、マグリブ(日没する地)とよばれる北アフリカと深い関係を保ってきました。乾燥地帯が大部分を占め、遊牧を生業とする人びとが移動する一方、バグダードやカイロなどでは古来より都市文化が栄えてきました。多くの住民はムスリムですが、ユダヤ教やキリスト教発祥の地でもあります。地球規模の変動の時代に移りゆく人びとの暮らしを紹介しています。

東南アジア 730㎡



生業 村の日常 都市の風景 芸能と娯楽

森と海に囲まれた東南アジア。熱帯・亜熱帯の気候に暮らし人びとは、早朝の涼しい時間から働きはじめ、40度近くになる日中は屋内で昼寝などをして暑さをしのぎます。夕方、スクールが通り過ぎた後は、少し暑さが和らぎ、人びとは買い物や農作業に出かけます。日が落ちて涼しくなると、友人や家族と屋台に出かけたり、演劇を見たりして余暇を楽しみます。本展示場では、「東南アジアの1日」をテーマに、その多彩な民族文化を紹介しています。

南アジア 600㎡



宗教文化—伝統と多様性 生態となりわい
都市の大衆文化 染織の伝統と現代 躍動する南アジア

南アジア地域は、北部の山岳地帯から西はアラビア海沿岸、東はベンガル湾沿岸にいたるさまざまな自然環境のもと、多様な宗教や文化、生活様式をもつ人びとが共存しあう知恵を育んできました。経済発展が著しい現代においても、その知恵は保たれています。この展示では、宗教文化や生業・工芸の多様性、都市を中心とした活気あふれる大衆文化、またグローバル化のなかで花ひらく染織文化のすがたを紹介しています。

中央・北アジア 710㎡



自然との共生 社会主義の時代 中央アジア
モンゴル シベリア・極北

中央・北アジアは、ユーラシア大陸の北東部を占める広大な地域です。古くから東西南北をむすぶ交渉路としての役割を担い、多様な民族が行き交ってきました。20世紀に社会主義を経験した後、市場経済に移行し、グローバル化の波にさらされながら伝統を再評価する動きがみられます。「自然との共生」「社会主義の時代」というふたつの共通テーマをふまえて、「中央アジア」「モンゴル」「シベリア・極北」の3つの地域に生きる人びとの今を紹介しています。

東アジア 朝鮮半島の文化 330㎡



精神世界 住の文化 食の文化 衣の文化
あそびの文化 知の文化

朝鮮半島の人びとは、外部の民族から影響を受けつつも、独自の文化を育んできました。有史以前は東シベリアの諸民族から、その後は中国から取り入れた文化要素を、独自のものに再編し、世界に例を見ないほど高度に統合された文化を獲得してきました。近代には日本に植民地支配され、独立後にはふたつの分断国家として急速な近代化を進めました。そして現代には、積極的に世界に進出する韓国人や、コリア系の海外生活者の姿も見られます。こうした文化の歴史的な重なりや躍動性を、精神世界、衣食住、あそびと知をテーマに紹介しています。

東アジア アイヌの文化 270㎡



アイヌとは カムイと自然 現代そして未来

アイヌは、北海道を中心に日本列島北部とその周辺に暮らし、寒冷な自然環境のもとで独自の文化をはぐくんできた先住民族です。江戸時代に幕府による支配が始まり、明治時代に同化がすすめられると、アイヌは差別を受け生活に困るようになりました。しかし近年、日本政府はその歴史的事実を認め、アイヌ民族を尊重した政策に取り組みははじめました。ここでは、伝統を継承しつつ、あらたな文化を創造する人びとの姿を紹介しています。

東アジア 中国地域の文化 660㎡



生業 民族楽器 チワン族の高床式住居 装い 工芸
台湾原住民族 宗教と文字 華僑・華人 継承される伝統中国

中国地域では、広大な面積と高低差のある地形がうみだす多様な自然環境のもと、さまざまな民族文化が育まれてきました。漢族が人口の90%以上を占め、平野部を中心に全国に居住しています。大陸の55の少数民族は、おもに西南、西北、東北地方の高地や草原に居住しており、台湾には漢族のほか先住のオーストロネシア系民族が居住しています。また、世界各地に、中国を故郷とする華僑・華人がくらしています。多様な生活環境から生みだされたさまざまな民族の文化を、歴史や地域性をふまえ、生業、装い、楽器、住居、工芸、宗教と文字、漢族の婚礼や祖先祭祀、台湾の原住民族、華僑・華人をテーマに紹介しています。

東アジア 日本の文化 1,460㎡



祭りと芸能 日々の暮らし 沖縄の暮らし
多みんぞくニホン

北海道から沖縄県まで、南北に細長い日本列島は、多様な自然に恵まれています。こうした環境のなかで、隣接する諸文化と影響しあいながら、さまざまな地域文化を展開してきました。また、近年では多くの外国人が私たちの隣人として生活をともにしています。ここでは、「祭りと芸能」、「日々の暮らし」、「沖縄の暮らし」、「多みんぞくニホン」という4つの角度から、日本文化の様相を展示しています。

通文化展示

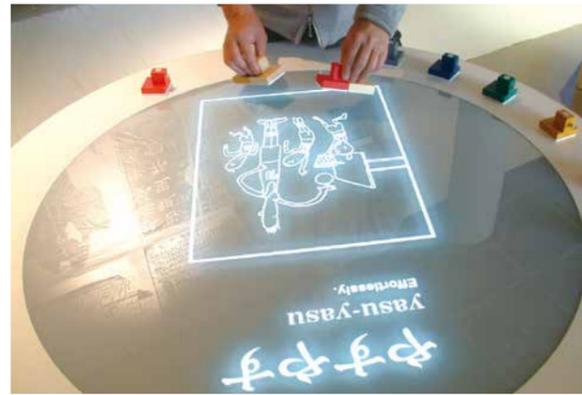
音楽 550㎡



太鼓 荒ぶる音 ゴング 伝え交わる音
チャルメラ 演じる音 ギター 歴史の中の音

私たち人類は、音や音楽によって意志や感情をつたえ、自分の位置を知り、訪れたことのない場所や過ぎ去った時に思いを馳せ、心を奮い立たせたり慰めたりしてきました。また、神仏や精霊など見ることでできない存在と交わってきました。この展示では、音や音楽と私たちの存在とのかかわりを、世界各地の楽器の例を通して考えます。

言語 170㎡



言葉を構成する要素 言語の多様性 世界の文字

音声や身ぶりを媒体とすることばは、高度に発達した伝達手段で、感情から科学的な知識まで多くの情報を伝えることができます。文化の多様性を反映すると同時に、人間のもつ認知能力や創造性などを生み出すことばは、人類のもつかけがえのない資産です。インタラクティブな仕掛けを通して、ことばの仕組みと世界のことばの多様性について紹介しています。

インフォメーション・ゾーン

イントロダクション



イントロダクション展示は、民博の展示の見方、文化人類学・民族学の考え方を直感的に身につけていたいただけるよう工夫した、文字通りのイントロダクション(=導入)のための展示です。ここから世界への旅が始まります。

ビデオテーク



世界の人びとの儀礼や芸能、生活の様子、あるいは展示資料の背景を紹介する映像展示として、昭和52年に世界ではじめて本館が開発しました。その後改良を重ね、マルチメディア番組や研究者がフィールドワークで取材した貴重な研究用映像資料も公開しています。平成24年からの現行システムでは、番組をより多角的に検索できるようメニュー画面を充実させるとともに、ブース内部の雰囲気も明るく変え、視聴環境を整えました。また、ユニバーサルデザインを意識したブースでは、車いすに乗ったままご利用いただけます。(平成29年度リクエスト件数: 56,719件)

探究ひろば



リサーチデスク 調べて深める
研究の現場から 知ってつながる
世界をさわる 感じて広がる

展示資料の情報を検索して調べることのできる「リサーチデスク」、研究者が取り組んでいる調査を紹介する「研究の現場から」、展示資料を見てさわって理解する「世界をさわる」の3つのコーナーを通して、民博の研究や展示をより詳しく知ることができます。展示場で見た資料についてもっと知りたい、民博の研究者って何を調査しているの、モノと身近に接してみたい、という探究心を満たし、知識をさらに深める場としてご活用ください。

特別展示

開館40周年記念特別展「ビーズつなぐ・かざる・みせる」

平成29年3月9日(木)～6月6日(火)

主催 国立民族学博物館

実行委員長 池谷和信

実行委員 [館内] 野林厚志、齋藤玲子

[館外] 遠藤 仁(秋田大学)、川口幸也(立教大学)

協力 大阪府立近つ飛鳥博物館、大阪府立弥生文化博物館、岡山市立オリエント美術館、京都古布保存会、公益財団法人大阪府文化財センター、KOBETんぼ玉ミュージアム、松野工業株式会社、ミキモト真珠島 真珠博物館、一般財団法人千里文化財団

飾り玉、数珠玉、トンボ玉などを総称するビーズ。ガラスや石や貝だけではなく動物の歯や虫の羽などから新たな世界が作りだされます。本展では、私たち人類が作り出した最高の傑作の一つとしてビーズをとらえて、つくる楽しみ、飾る楽しみをとらえて日本や世界の人のびととしてのビーズの魅力を紹介しました。



開館40周年記念特別展「よみがえれ! シーボルトの日本博物館」

平成29年8月10日(木)～10月10日(火)

主催 国立民族学博物館、国立歴史民俗博物館、朝日新聞社

実行委員長 園田直子

実行委員 [館内] 吉田憲司、野林厚志、齋藤玲子、日高真吾

[館外] 佐々木史郎(国立アイヌ民族博物館設立準備室)、

日高 薫(国立歴史民俗博物館)

共同企画 公益財団法人東京都歴史文化財団 東京都江戸東京博物館、長崎歴史文化博物館、名古屋市博物館

特別協力 ミュンヘン五大陸博物館、ブランデンシュタイン=ツェッペリン家

協力 全日本空輸、一般財団法人千里文化財団

後援 日本赤十字社

江戸時代後期に来日したシーボルトは、日本の文化や自然に関わる膨大な資料をヨーロッパに持ち帰りました。ミュンヘン五大陸博物館のシーボルト・コレクションおよびシーボルトの末裔にあたるブランデンシュタイン=ツェッペリン家所蔵の関係資料をとおし、シーボルトの日本博物館が150年ぶりによみがえった展示となりました。



特別展示一覧

展覧会名	展覧会期間	展覧会名	展覧会期間
「大アンデス文明展—よみがえれる太陽の帝国インカ」	平成元年9月14日～12月12日	「西アフリカ おはなし村」	平成15年7月24日～11月25日
「赤道アフリカの仮面—秘められた森の精霊たち」※	平成2年3月15日～5月31日	「アイスからのメッセージ—ものづくりと心」	平成16年1月8日～2月15日
「海を渡った明治の民具 モース・コレクション展」	平成2年9月13日～12月4日	「多みぞくニホン—在日外国人のくらし」	平成16年3月25日～6月15日
「ケンベル展—ドイツ人の見た元禄時代」※	平成3年2月7日～4月16日	「アラビヤナイト大博覧会」	平成16年9月9日～12月7日
「大インド展—ヒンドゥー世界の神と人」	平成3年8月1日～11月5日	「きのうよりワクワクしてきた。」	平成17年3月17日～6月7日
「文明の十字路口—ダゲスタン—コーカサスの民族美術」※	平成4年3月12日～5月19日	「インド サリ—世界」	平成17年9月8日～12月6日
「オーストラリア—アボリジニ—狩人と精霊の5万年」	平成4年9月10日～12月8日	「みんぱくキッズワールド：こどもとおとなをつなぐもの」	平成18年3月16日～5月30日
「民族学の先覚者 鳥居龍藏の見たアジア」※	平成5年3月11日～5月14日	「更紗今昔物語—ジャワから世界へ」	平成18年9月7日～12月5日
「アイヌモシロ—民族文様から見たアイヌの世界」	平成5年6月10日～8月17日	「聖地★巡礼—自分探しの旅へ」	平成19年3月15日～6月5日
「ジャワ更紗—その多様な伝統の世界」	平成5年9月9日～11月30日	「オセアニア大航海展—ヴァカ モアナ、海の人類大移動」	平成19年9月13日～12月11日
「台湾先住民の文化 伝統と再生」※	平成6年3月10日～5月24日	「深奥の中国—少数民族の暮らしと工芸」	平成20年3月13日～6月3日
「絨毯—シルクロードの華」	平成6年9月8日～11月29日	「アジアとヨーロッパの肖像」	平成20年9月11日～11月25日
「ラテンアメリカの音楽と楽器」※	平成7年3月16日～5月30日	「千家十職×みんぱく：茶の湯のものづくりと世界のわざ」	平成21年3月12日～6月14日
「現代マヤ—色と織に魅せられた人々」	平成7年9月14日～11月30日	「自然のこゝろ 命のかたち—カナダ先住民の生み出す美」	平成21年9月10日～12月8日
「シーボルト父子の見た日本」	平成8年8月1日～11月19日	「彫刻家エル・アナツイのアフリカ—アートと文化をめぐる旅」	平成23年9月16日～12月7日
「異文化へのまなざし—大英博物館コレクションにさぐる」	平成9年9月25日～平成10年1月27日	「ウメサオ タダオ展」	平成23年10月6日～12月6日
「なかはどうなってるの?—民族資料をX線でみたら」※	平成10年3月12日～5月26日	「千島—樺太—北海道 アイヌのくらし—ドイッコレクションを中心に」	平成24年4月26日～6月19日
「大モンゴル展—草原の遊牧文明」	平成10年7月30日～11月24日	「今和次郎 採集講義—考現学の今」	平成24年9月13日～11月27日
「南太平洋の文化遺産—ジョージ・ブラウンコレクション」※	平成11年3月11日～5月31日	「世界の織機と織物—織って! みて! 織りのカラクリ大発見」	平成25年3月14日～6月11日
「越境する民族文化—いきかう人びと、まじわる文化」	平成11年9月9日～平成12年1月11日	「マダガスカル 霧の森のくらし」	平成25年9月19日～12月3日
「みんぱくミュージアム劇場—からだは表現する」	平成12年3月18日～5月14日	「洪沢敬三記念事業 屋根裏部屋の博物館 Attic Museum」	平成26年9月11日～12月9日
「進化する映像—影絵からマルチメディアへの民族学」	平成12年7月20日～11月21日	「イメージの力—国立民族学博物館コレクションにさぐる」	平成27年8月27日～11月10日
「大正昭和くらしの博物館—民族学の父・洪沢敬三とアチック・ミュージアム」	平成13年3月15日～6月5日	「韓国食博—わがちあひ—おもてなしのかたち」	平成28年2月25日～5月10日
「ラッコとガラス玉」	平成13年9月20日～平成14年1月15日	「東西列像—蝦夷地イメージをめぐる人・物・世界—」	平成28年9月8日～11月29日
「2002年ソウルスタイル」	平成14年3月21日～7月16日	「見世物大博覧会」	平成29年3月9日～6月6日
「世界大風呂敷展 布で包む ものと心」	平成14年10月3日～平成15年1月14日	「ビーズつなぐ・かざる・みせる」	平成29年8月10日～10月10日
「マンダラー—チベット—ネパールの仏たち」	平成15年3月13日～6月17日	「よみがえれ! シーボルトの日本博物館」	平成30年3月8日～5月29日
		「太陽の塔からみんぱくへ—70年万博収集資料」	

※印は、平成13年以前は企画展に区分されていましたが、現在はすべて特別展に統一されています。

企画展示

開館40周年記念・カナダ建国150周年記念企画展 「カナダ先住民の文化のカー過去、現在、未来」

平成29年9月7日(木)～12月5日(火)

主催 国立民族学博物館
実行委員長 岸上伸啓
実行委員 [館内] 齋藤玲子、伊藤敦規
後援 在日カナダ大使館、日本カナダ学会
協力 カナダ観光局、カナダ歴史博物館、プリティッシュコロンビア大学人類学博物館



多様な民族が住むカナダは、2017年に建国150周年の節目を迎えました。建国以前からその地に住んできた人びとは、カナダ先住民と呼ばれています。彼らはヨーロッパ人との接触を契機として大きな社会変化を経験しましたが、独自の文化を継承するとともに、あらたに創り出してきました。本展では、カナダの北西海岸地域、平原地域、東部森林地域、亜極北地域、極北地域における多様な先住民文化を紹介しました。

開館40周年記念企画展

アイヌ工芸品展「現れよ。森羅の生命― 木彫家 藤戸竹喜の世界」

平成30年1月11日(木)～3月13日(火)

主催 国立民族学博物館、公益財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構
実行委員長 齋藤玲子
実行委員 [館内] 吉田憲司、岸上伸啓、伊藤敦規
[館外] 五十嵐聡美(北海道立帯広美術館)、
北原次郎太(北海道大学アイヌ・先住民研究センター)、
岡田恵介((公財)アイヌ文化振興・研究推進機構)
後援 国土交通省、北海道教育委員会、公益社団法人北海道アイヌ協会、
大阪府、吹田市、吹田市教育委員会
出品協力 一般財団法人前田一歩園財団、NPO法人元気の丘ギャラリー、株式会社ほくみん、
正徳寺、鶴雅リゾート株式会社、角谷 博氏、佐々木猛氏、藤戸竹喜氏、吉田いし氏



藤戸竹喜(ふじと たけき/1934-)は、旭川を拠点に「熊彫り」を生業としていた父のもとで、12歳から木彫を始めました。以来、父祖の彫りの技を受け継ぎながら、熊をはじめ狼やラッコといった北の動物たちと、アイヌ文化を伝承してきた先人たちの姿を木に刻み、繊細さと大胆さが交差する独自の世界を築いてきました。卓抜なイメージ力・構想力とともに、生命あるものへの深い愛情に根ざした生気あふれる写実表現は、他の追随を許さず、北海道を代表する彫刻家として国内外から高い評価を得ています。本企画展では、動物たちの俊敏な動きをとらえた初期作から、民族の歴史と威厳をモニュメンタルに伝える等身大人物像まで、約90点の作品を一堂に展示し、70年にわたる創作活動の軌跡とその背景をたどりました。

巡回展示

巡回展「イメージのカー国立民族学博物館コレクションにさぐる」

平成29年7月22日(土)～9月3日(日) 石川県立歴史博物館

担当者 吉田憲司

平成26年2月～6月に国立新美術館にて、また、同年9月～12月に本館特別展として、平成27年6月～8月には福島県の郡山市立美術館にて、平成28年10月～11月には香川県立ミュージアムにて巡回展を開催しました。今回の石川県立歴史博物館での展覧会「イメージの力」は、国立民族学博物館のコレクションの中から世界各地の造形を精選し、人類の生み出したイメージの喚起する感覚や効果、すなわちイメージの働きや享受のありかたに普遍性があるかを検証しました。

その他

開館40周年記念新着資料展示

「標 交紀(しめぎゆきとし)の咖啡(コーヒー)の世界」

平成29年9月28日(木)～11月14日(火)

プロジェクトリーダー 菅瀬晶子

かつて東京・吉祥寺に、伝説の自家焙煎咖啡店がありました。その名は「もか」。マスターの標交紀は、コーヒー豆の焙煎技術の探究にたくいまれなる熱意を注ぎ込み、その生涯を捧げました。ついにはコーヒー文化の源流を求めて世界各地を旅して回り、コーヒー関連資料を収集します。本展では、みんなに寄贈された300点以上にもものぼる「標コレクション」から厳選した約50点をもとに、中東からヨーロッパを経由して日本へ伝わり、標の手によって芸術の域にまで昇華された「咖啡」の世界を紹介しました。



開館40周年記念写真展「世界のフィールドからみんなへ」

平成29年11月9日(木)～12月26日(火)

企画統括 飯田 卓

みんなの展示は、世界各地での学術調査と資料収集をもとにしています。1977年に初めて展示場が作られたときも、数々の調査や収集が基礎になりました。この写真展では、そうした館員および先駆者たちの活動とともに、40年前の各地のようすを関係する展示場に、写真を設置して紹介しました。



国際協力・研修

JICA 課題別研修「博物館とコミュニティ開発コース」の実施 "Museums and Community Development"

本コースは、博物館の運営に必要な、収集・整理・保存・展示・教育に関する実践的技術の研修を実施し、博物館を通じて各国の文化の振興に貢献できる人材を育成するものです。従来から、国際協力機構(JICA)主宰の「博物館技術コース」の一環として、本館で約3週間にわたり「博物館学国際協力セミナー」を実施してきましたが、平成16年度からは、本館がJICAから全面的委託を受け、滋賀県立琵琶湖博物館と共同で、4ヶ月にわたる研修を「博物館学コース」として実施し、毎年、開発途上の国や地域から約10名を外国人受託研修員として受け入れています。研修は、博物館の諸活動に直接かかわる人々に特化したコースとなっています。平成24年からは東日本大震災後の状況を踏まえ、博物館資料の保安や防災のカリキュラムを強化するとともに、博物館運営について自らが立案し、実践・普及できるような研修項目、さらには観光関連分野との連携も追加しました。

平成27年度からは、「博物館とコミュニティ開発」と名称変更し、博物館が地域社会に果たす役割により重点を置いた研修を3ヶ月にわたり行いました。平成29年度は、アルメニア・エジプト・パプアニューギニア・サモア・セーシェル・バヌアツ・ザンビア・トルコ・ヨルダンの9ヶ国・地域から10名の研修員、サウジアラビアからの1名のオブザーバーを受け入れ、9月25日から12月16日まで研修を行いました。本館と琵琶湖博物館での実施だけではなく、新潟県中越大地震の被災地や中越メモリアル回廊、東京国立博物館や国立科学博物館、広島平和記念資料館などへの研修旅行も行いました。また、研修員全員が自国の博物館の活動や課題を報告し、検討する公開フォーラム「世界の博物館2017」を平成29年11月3日に本館で開催しました。82名の参加者があり、報告者と活発な意見交換を展開しました。

コースの名称と運営形態は発展的に更新していますが、博物館を通じた国際交流の促進というコースの目的は、一貫して継続しており、平成30年3月までに、世界各地からの研修修了者及びオブザーバーは60ヶ国・地域の248名におよび、国際的ネットワークを築いています。



公開フォーラム



個別研修(予防保存)



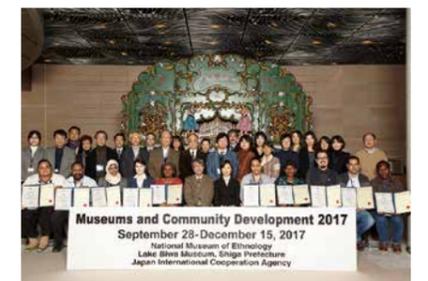
民博での研修



中越研修



着付体験



閉講式

博物館社会連携

本館では、国内外の博物館や大学などとの学術連携を通して、文化資源の系統的、有機的活用を実践するためのネットワークづくりを試みてきました。また、さまざまな団体と連携して、広く社会へ貢献する事業や活動を展開しています。

学習キット「みんぱく」

平成29年度 貸出件数のべ215件

学校や各種社会教育施設を対象に、本館の研究成果をわかりやすく伝えることを目的として、学習キット「みんぱく」の貸出を実施しています。「みんぱく」は世界の国や地域の衣装や楽器、日常生活で使う道具や子どもたちの学用品などをスーツケースにパックしたもので、15種類26パックを用意しています。異文化との出会いにおいてどのようにものを見つめ、それらと語ることができるのか、その先にある物語をどう読みとるのかという、本館ならではのコンセプトで企画されています。

貸出パック

- 極北を生きる—カナダ・イヌイトのアラックとダブルコート
- アンデスの玉手箱—ペルー南高地の祭りと生活
- ジャワ島の装い—宗教と伝統
- インドのサリーとクルター
- アラビアンナイトの世界
- イスラム教とアラブ世界の暮らし
- ソウルスタイル—こどもの一日
- ソウルのこども時間
- プリコラージュ
- アイヌ文化にであう
- アイヌ文化にであう2—樹皮からつくる着物
- モンゴル—草原のかおりをたのしむ
- あるく、ウメサオタオ展
- 世界のムスリムの暮らし1—日常の中の折り（平成30年4月運用開始）
- 世界のムスリムの暮らし2—同時代を生きる（平成30年4月運用開始）



みんぱく
「世界のムスリムの暮らし1」—日常の中の折り



みんぱく
「世界のムスリムの暮らし2」—同時代を生きる

ワークショップ

本館の研究者の研究成果を社会に還元することをめざし、ものづくりなどの体験型プログラムを通して、世界の文化を紹介しています。

実施日	実施ワークショップ	講師
平成29年4月28日(金) 5月2日(火) 5月27日(土)	特別展「ビーズ—つなぐ・かざる・みせる」関連 「ビーズの素材に注目！—ペーパービーズをつくろう」	池谷和信
平成29年7月22日(土)	夏休みこどもワークショップ 「イスラームの人の衣装を知ろう—フィールドワークに挑戦！」	菅瀬晶子
平成29年10月1日(日) 11月5日(日)	企画展「カナダ先住民の文化の—過去、現在、未来」 関連ワークショップ「カナダ先住民の—アートを作ろう」 「カナダ北西海岸先住民のワタリガラスの仮面を作ろう」 「カナダ先住民イヌイトのステンシル版画を作ろう」	岸上伸啓 田主 誠 (版画家)
平成29年10月9日(月・祝)	新着資料展示「標交紀の—コーヒーの世界」関連ワークショップ 「標交紀の—コーヒーとは？」	菅瀬晶子
平成29年12月23日(土・祝)	年末年始展示イベント「いぬ」関連イベント 「みんぱくでいぬをさがそう！」	丸川雄三



ワークショップ
「ビーズの素材に注目！—ペーパービーズをつくろう」

ワークシート

テーマに沿って展示場を見学できるもの、特別展や企画展にまつわるもの、自主学習ができるものなどをご用意しています。本館のホームページ上に掲載しており、ダウンロードして自由にご利用いただけます。

カムイノミ儀礼と北海道アイヌ協会技術者研修

本館では、公益社団法人北海道アイヌ協会とのあいだに協定を結んで、ふたつの事業を実施しています。ひとつはカムイノミ儀礼の実施です。アイヌ語のカムイノミは「神への祈り」という意味であり、その実施は、本館が所蔵するアイヌの標本資料の安全な保管と後世への確実な伝承を目的としています。従来は萱野茂氏(故人、萱野茂二風谷アイヌ資料館前館長)によって非公開でおこなわれていました。平成19年度からは、社団法人北海道ウタリ協会(現・公益社団法人北海道アイヌ協会)の会員が順にカムイノミとあわせてアイヌ古式舞踊の演舞を実施し、公開しています。平成29年度は八雲アイヌ協会・苫小牧アイヌ協会の協力を受けました。もう一つの事業はアイヌ協会が派遣する伝統工芸技術者の受け入れです。本館の所蔵する資料の研究・活用による学術研究の進展とアイヌ民族の文化の振興を目的としています。



カムイノミ儀礼

音楽の祭日

フランスで始まった夏至の日を音楽で祝う「音楽の祭典」が、平成14年から日本でも「音楽の祭日」として全国で開催されています。本館もその趣旨に賛同し、平成15年から音楽を愛する一般市民に広く本館施設を開放して実施しています。平成29年度は、6月18日(日)に25のグループや個人が、さまざまな楽器による演奏をおこないました。



音楽の祭日1



音楽の祭日2

博学連携事業

校外学習や遠足など博物館見学の準備や事前・事後の学習に役立つツールを紹介することを目的として、春と秋の年に2回「先生のためのガイド」をおこない、授業での博物館活用の促進を図っています。平成29年度は87団体268名の参加がありました。また、中学生に「職場体験活動」の機会を提供しており、平成29年度は6校14名を受け入れました。

ボランティア団体の活動

「みんぱくミュージアムパートナーズ(MMP)」は、本館の博物館活動をサポートする自律的な組織として平成16年9月に発足した団体です。展示場内における視覚障がい者の展示体験をサポートするプログラム「視覚障がい者案内」や、主に小学生を対象とした体験型見学プログラム「わくわく体験 in みんぱく」、一般来館者向けのものづくりワークショップなど、多岐に広がる活動を本館との協働で進めています。また、館外でおこなわれるワークショップフェスやボランティア交流会にも積極的に参加し、他の博物館や施設との交流を深めています。



視覚障がい者案内



わくわく体験 in みんぱく



ナレッジキャピタル ワークショップフェス

広報・事業

世界の諸民族の文化について、最新の研究成果を社会に公開するため、各種事業や広報活動を実施しています。

みんぱくゼミナール

毎月第3土曜日に、研究部の教員などが最新の研究成果をわかりやすく講演しています。

平成29年度実施 受講者総数 2,409名 (平成28年度 2,744名) □印は特別展開連事業 ○印は企画展開連事業

実施回数	実施日	担当講師	演題
467回	2017年4月15日(土)	相島葉月	エジプトでイスラーム思想のテキストを読む
468回	2017年5月20日(土)	鈴木七美	心地よい暮らし(エイジング・イン・プレイス)ーコミュニティをつなぐアーミッシュたちの暮らしから
469回	2017年6月17日(土)	三島禎子	つくられる移民
470回	2017年7月15日(土)	南真木人	ネパールの楽師カースト・ガンダルバの現在
□471回	2017年8月19日(土)	日高薫(国立歴史民俗博物館 教授)、野林厚志、園田直子	シーボルトの日本展示と博物学
○472回	2017年9月16日(土)	岸上伸啓	多文化主義の国カナダにおける先住民文化
473回	2017年10月21日(土)	林 勲男	ジョージ・ブラウン・コレクションの軌跡をたどる
474回	2017年11月18日(土)	吉田憲司	仮面の世界をさぐるーアフリカ、そしてミュージアム
475回	2017年12月16日(土)	信田敏宏	オラン・アスリの家族ー母系制・妻方居住・一夫多妻
○476回	2018年1月20日(土)	五十嵐聡美(北海道立近代美術館)、貝澤 徹(木彫家)、岡田恵介(公益財団法人アイヌ文化振興・研究推進機構)、齋藤玲子	木彫り熊からアートモニュメントまで
477回	2018年2月17日(土)	山中由里子	ヒュードロードの系譜ーこの世ならざるものの出現にともなう音
□478回	2018年3月17日(土)	野林厚志	万博資料収集団ー太陽の塔に集った仮面、神像、なりわいの道具



第470回 「ネパールの楽師カースト・ガンダルバの現在」



第472回 「多文化主義の国カナダにおける先住民文化」



第478回 「万博資料収集団ー太陽の塔に集った仮面、神像、なりわいの道具」

みんぱくウィークエンド・サロンー研究者と話そう

研究部のスタッフと来館者が、展示場内でより身近に語り合いながら、みんぱくの研究を知ってもらうことを目的に、開館30周年記念事業として平成19年度に始まりました。平成29年度も引き続き、ほぼ毎週日曜日に計46回開催し、参加者は計1,884名でした。

研究公演

文化人類学・民族学に関する理解を深めてもらうことを目的として、世界の諸民族の音楽や芸能などの公演を実施しています。

平成29年度実施 参加者総数 188名

めばえる歌ー民謡の伝承と創造ー

実施日 平成29年11月11日(土)

解説 川瀬 慈

出演 井上博斗、松田美緒、山口亮志、山城大督、吉田國俊



研究公演「めばえる歌ー民謡の伝承と創造ー」

みんぱく映画会

上映される機会の少ない文化人類学・民族学に関する貴重な映像資料などを教員の解説を交えて上映しています。

平成29年度実施 参加者総数 2,252名

エジプト映画「ヤギのアーリーとイブラヒム」上映会

実施日 平成29年9月9日(土)
担当講師 飯泉菜穂子、川瀬 慈、相島葉月
題名 ヤギのアーリーとイブラヒム
参加人数 315名

台湾文化光点計画 台湾映画鑑賞会 映画から台湾を知る

実施日 平成29年10月14日(土)
担当講師 野林厚志
題名 祝宴! シェフ
参加人数 337名

人間文化研究機構 北東アジア地域研究推進事業 国立民族学博物館拠点 公開セミナー

渡り鳥と人のかかわりー北東アジアから考えるー

実施日 平成30年2月11日(日)
担当講師 樋口広芳(鳥類学者・東京大学名誉教授)、今井友樹(映画監督)、卯田宗平、池谷和信
題名 鳥の道を越えて
参加人数 315名

みんぱくワールドシネマ

「映像から考える〈人類の未来〉」のテーマにふさわしい映画を選び、研究者の解説による上映会をシリーズで実施します。立場による考え方の違いを互いに認め合いながら、公正で平等な社会をどのように実現すればよいのか、世界各地に視野を広げて、映画を通して考えます。

実施日	担当講師	題名	参加者数
第37回 平成29年9月18日(月・祝)	鈴木 紀、菅瀬晶子	おみおくりの作法	403名
第38回 平成29年11月5日(日)	鈴木 紀、八杉佳穂(国立民族学博物館名誉教授)	火の山のマリア	284名
第39回 平成30年2月10日(土)	菅瀬晶子、南出和余(桃山学院大学准教授)	テレビジョン	302名
第40回 平成30年3月10日(土)	鈴木 紀、杉本良男(国立民族学博物館名誉教授)	ディーバンの闘い	296名

連携講座「みんぱく×ナレッジキャピタル」

平成26年度に一般社団法人ナレッジキャピタルとの間に取り交わした連携協力協定に基づき、連続講座「みんぱく×ナレッジキャピタル」を開講しました。この講座では、大阪・梅田のカフェを会場として、研究者がそれぞれの研究対象をわかりやすく解説しました。

連携講座「みんぱく×ナレッジキャピタル ピーズつなぐ・かざる・みせる」 参加者総数 167名

回数	実施日	担当講師	題名
第1回	平成29年4月12日(水)	池谷和信	世界はピースでつながっている
第2回	平成29年4月19日(水)	野林厚志	装身具から考える台湾原住民の文化
第3回	平成29年5月10日(水)	齋藤玲子	アイヌとガラス玉の交易
番外	平成29年5月21日(日)	池谷和信	ピースの魅力ーみんぱく展示ツアー

連携講座「みんぱく×ナレッジキャピタルーフィールドワークを語るー」 参加者総数 212名

回数	実施日	担当講師	題名
第1回	平成29年11月27日(月)	飯田 卓	フィールドワークというお仕事ーあこがれから現実へ
第2回	平成29年12月13日(水)	丹羽典生	太平洋を歩く：カフェ飲みから日本人探検家まで
第3回	平成29年12月20日(水)	卯田宗平	鶴銅技術の共通性と相違性
第4回	平成30年1月10日(水)	伊藤敦規	ソースコミュニティの人々との資料熟覧ー博物館収蔵庫でのフィールドワーク
第5回	平成30年1月24日(水)	吉岡 乾	「世界の屋根」で言語を求める
番外	平成30年2月4日(日)	齋藤 晃	アマゾンの聖人祭ー在来の伝統とキリスト教の融合

その他の連携事業

平成29年11月18日(土)・11月19日(日)に、北大阪の8市3町の美術館・博物館の文化祭「北大阪ミュージアムメッセ」を本館にて開催し、展示やワークショップ、伝統文化の披露等がおこなわれました。

また、吹田市と双方の発展と充実に寄与し、地域連携を積極的に推進することを目的とした「国立民族学博物館と吹田市との連携協力に関する基本協定」を締結し、「吹田市5大学・研究機関 生涯学習ナビ」(http://www.suita5u.com)への参画等、情報発信を進めています。平成29年9月に、吹田市情報発信プラザ「Inforestすいた」で「みんぱくフェア」を開催し、本館の活動を紹介しました。(来場者数25,496名)



マスメディアを通じた広報

広く社会に本館の研究や博物館活動について広報するため、マスメディアを通じた広報活動を展開しています。「報道関係者と民博との懇談会」(毎月第3木曜日開催)において、「研究こぼれ話」などのコーナーをもうけ、みんなくの研究や博物館活動を積極的に紹介しています。29年度はテレビ(19件)、ラジオ(69件)、新聞(723件)、雑誌(119件)、ミニコミ誌(224件)、その他(124件)の各媒体総数1,278件で、本館の活動が紹介されました。

「旅・いろいろ地球人」

平成21年4月から毎日新聞夕刊(毎週木曜日)に掲載
平成17年4月から21年3月までは、「異文化を学ぶ」というタイトルで掲載

「みんなくモノ語り」

平成29年10月から産経新聞夕刊(月3~4回)に掲載

出版活動

要覧

国立民族学博物館要覧2017

National Museum of Ethnology: Survey and Guide 2017-18

広報・普及

MINPAKU Anthropology Newsletter

月刊みんなく

みんなくカレンダー

展示解説

国立民族学博物館展示案内

展示図録「ビーズ つなぐ・かざる・みせる」

Special Exhibition Catalogue “BEADS IN THE WORLD”

展示図録「現れよ。森羅の生命—木彫家 藤戸竹喜の世界」

利用案内

本館案内リーフレット(日本語、英語、中国語、ハングル、子ども用、点字)

展示解説シート(日本語、英語)

団体見学利用案内

特別展展示案内リーフレット

各賞の受賞

開館40周年記念企画展

アイヌ工芸品展「現れよ。森羅の生命—木彫家 藤戸竹喜の世界」
「美連協奨励賞」

主催：美術館連絡協議会

受賞者：佐藤弥生(札幌芸術の森美術館)、齋藤玲子(本館准教授)、
五十嵐聡美(北海道立近代美術館)

開館40周年記念特別展

「ビーズつなぐ・かざる・みせる」ポスター

「日本タイポグラフィ年鑑2018」入選

主催：特定非営利活動法人 日本タイポグラフィ協会

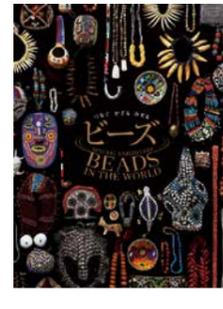
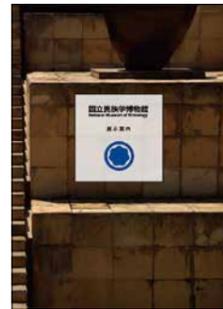
受賞者：佐藤大介(株式会社サトウデザイン)

開館40周年 国立民族学博物館 展示案内

「第59回全国カタログ展 実行委員会奨励賞」

主催：一般社団法人 日本印刷産業連合会

受賞組織：日本写真印刷コミュニケーションズ株式会社



design: mitsuo katsui

インターネット

ホームページ <http://www.minpaku.ac.jp/>

本館の研究活動、博物館展示・事業活動、大学院教育情報の他、刊行物、文献図書資料、標本資料などあらゆる情報を世界に発信しています。

メールマガジン <http://www.minpaku.ac.jp/museum/enews>

メールマガジン「みんなくe-news」を月1回発行し、最新の研究情報や、特別展・企画展情報、みんなくゼミナール等の各種事業のお知らせを配信しています。

ソーシャルメディア Facebook <http://www.facebook.com/MINPAKU.official>

Twitter <http://twitter.com/MINPAKUofficial>

YouTube <http://www.youtube.com/MINPAKUofficial>

Instagram <https://www.instagram.com/MINPAKUofficial>

さまざまなソーシャルメディアを活用して、研究、博物館活動を情報発信するとともに、本館及び文化人類学・民族学に関心をもつ人たちが交流する場を提供しています。

訪問者数(Visits) 平成29年度 762,592



ページビュー数(Page Views) 平成29年度 2,426,037



※平成24年度より、統計方法を変更しました。

※アクセス解析の不備により、平成29年12月19日~平成30年1月11日は集計に含まれておりません。

平成29年度の入館者数

年間入館者

入館者総数	239,476人
1日平均	783人
開館からの累計	10,971,646人

入館者内訳

一般	157,486人
高・大学生	23,818人
小・中学生	51,290人
小学生未満	6,882人

特別展示

開館40周年記念特別展「ビーズつなぐ・かざる・みせる」(平成29年3月9日~6月6日)	54,292人
開館40周年記念特別展「よみがえれ! シーボルトの日本博物館」(平成29年8月10日~10月10日)	21,349人

企画展示

開館40周年記念・カナダ建国150周年記念企画展 「カナダ先住民の文化の力—過去、現在、未来」(平成29年9月7日~12月5日)	60,753人
開館40周年記念企画展 アイヌ工芸品展「現れよ。森羅の生命—木彫家 藤戸竹喜の世界」(平成30年1月11日~3月13日)	24,563人

巡回展示

巡回展「イメージの力—国立民族学博物館コレクションにさぐる」 石川県立歴史博物館(平成29年7月22日~9月3日)	4,883人
--	--------



大学共同利用機関法人 人間文化研究機構(略称:人文機構)は、4つの大学共同利用機関法人のうちの一つであり、人間文化研究にかかわる6つの大学共同利用機関で構成されています。それぞれの機関は、人間文化研究の各分野におけるわが国の中核的研究拠点、国際的研究拠点として基盤的研究を深める一方、学問的伝統の枠を超えて相補的に結びつき、国内外の研究機関とも連携して、現代社会における諸課題の解明と解決に挑戦しています。真に豊かな人間生活の実現に向け、人間文化の研究を推進し、新たな価値の創造を目指します。

研究推進・情報発信事業

人文機構は、平成28年度に総合人間文化研究推進センターと総合情報発信センターを設置しました。2つのセンターでは、6つの機関をハブとした研究ネットワークを構築して国際共同研究を推進するとともに、国内外への積極的な発信や次代を担う若手研究者の育成に取り組んでいます。



4つの大学共同利用機関法人



人文機構本部と6つの大学共同利用機関の所在地

総合人間文化研究推進センター

6つの機関と国内外の大学等研究機関や地域社会との連携・協力を促進し、人間文化の新たな価値体系の創出に向けて、現代的諸課題の解明に資する組織的共同研究「基幹研究プロジェクト」を推進しています。

総合人間文化研究推進センターが推進する基幹研究プロジェクト

機関拠点型	総合資料学の創成と日本歴史文化に関する研究資源の共同利用基盤構築
	日本語の歴史的典籍の国際共同研究ネットワーク構築
	多様な言語資源に基づく総合的日本語研究の開拓
	大衆文化の通時的・国際的研究による新しい日本像の創出
連携型	アジアの多様な自然・文化複合に基づく未来可能社会の創発
	人類の文化資源に関するフォーラム型情報ミュージアムの構築
	日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築
ネットワーク型	アジアにおける「エコヘルス」研究の新展開
	異分野融合による「総合書物学」の構築

総合情報発信センター

人間文化にかかわる総合的学術研究資源をデジタル化することで、広く国内外の大学や研究者への活用を促進するとともに、社会との双方向的な連携を強化することで、研究成果の社会還元を推進しています。

総合情報発信センターの情報・発信事業

研究資源高度連携事業	nihu INT https://int.nihu.jp 機構内外の情報資源を統合検索する、人間文化研究データベース
情報発信事業	リポジトリ https://www.nihu.jp/ja/publication/database#repo 国際的に研究成果を発信するため各機関でリポジトリを公開 研究者データベース http://nrd.nihu.jp 機構所属の研究者情報を一元的に公開する研究者データベース運用 国際リンク集 https://guides.nihu.jp/japan_links 日本文化研究情報への総合的アクセスを支援するためのリンク集を構築し運用 NIHU Magazine https://www.nihu.jp/ja/publication/nihu_magazine 機構の最新の研究活動、成果を海外に発信するウェブマガジン
人文機構シンポジウム	研究活動及び研究成果を広く社会に発信
人文機構シンポジウム	第30回 海の向こうの日本文化—その価値と活用を考える—(H29年6月) 第31回 エコヘルス:生き方を考える—環境・健康・長寿—(H30年2月) 第32回 人文知による情報と知の体系化~異分野融合で何をつくるか~(H30年2月)
社会連携事業	産業界や外部機関と連携し、研究成果の社会還元を推進 ・味の素の文化センターと共催でシンポジウムを開催(平成30年1月) ・大手町アカデミアと連携し、特別講座を開催(平成30年3月)

博物館・展示を活用した最先端研究の可視化・高度化事業

機構の機関と大学等研究機関とが連携し、博物館および展示を活用して人間文化に関する最先端研究を可視化し、多分野協業や学界並びに社会との共創により研究を高度化する研究推進モデル「博物館・展示を活用した最先端研究の可視化・高度化サイクル」を構築し、新領域創出を目指します。

歴史文化資料保全の大学・共同利用機関ネットワーク事業

機構(主導機関:歴博)、東北大学、神戸大学を中核として、全国各地の主に大学を中心に活動する「史料ネット」との連携構築を通じて、資料調査とデータ記録化、広域的相互支援体制の確立、資料保存研究等の歴史文化資料保全事業を推進します。さらに資料を活用した研究や教育プログラム開発、国内外に向けた情報発信を通じて、地域社会における歴史文化の継承と創成を目指します。



人間文化研究機構・東北大学・神戸大学 合同メディア懇談会「歴史文化資料保全の大学・共同利用機関ネットワーク構築事業」

人文知コミュニケーター

人間文化研究の成果をわかりやすく社会に伝え、さらに研究に対する社会からの要望、反響を吸上げ研究現場に還元するスキルを有した研究者を人文知コミュニケーターとして育成する事業を実施しています。研究資源や多様な媒体、発信機能を活用し、研究者と社会のコミュニケーションを実現する「つなぐ人」として、人文学の振興に資する人材を組織的に育成するとともに、社会連携、共創による研究の可視化、発展をはかります。



人文知コミュニケーターによる講演
(於:日本科学未来館、平成29年12月)

社会連携

地域社会や産業界などと連携し、人間文化研究成果の社会還元を推進しています。

平成29年度の連携事業

- ・九州大学等と連携して第30回人文機構シンポジウムを開催
- ・味の素の文化センターと共催、クックパッド株式会社と協力してシンポジウムを開催
- ・大手町アカデミア(YOMIURI ONLINE、中央公論新社)と連携して特別講座を開催
- ・東北大学、神戸大学と合同でメディア懇談会を開催

大学院教育

国立大学法人総合研究大学院大学(総研大)の基盤機関として、文化科学研究科に4つの機関が各機関の特色を生かした5つの専攻(博士後期課程)を設置し、高い専門性と広い視野を持った研究者を養成しています。また、機構の6つの機関では、他大学の大学院生を受け入れてその研究を支援するなど、次世代を担う人材育成に貢献しています。



人間文化研究機構・味の素の文化センター共催シンポジウム「江戸の書物から読み解く庶民の食べ物と生活」(於:味の素グループ高輪研修センター)

文化科学研究科の各専攻

- 地域文化学専攻(民博)
- 比較文化学専攻(民博)
- 国際日本研究専攻(日文研)
- 日本歴史研究専攻(歴博)
- 日本文学研究専攻(国文研)

基幹研究プロジェクト

人間文化研究機構では、平成28年度より6カ年にわたり、国内外の大学等研究機関や地域社会等と組織的に連携し、現代的諸課題の解明に資する「基幹研究プロジェクト」を実施しています。
みんぱくが担当しているのは、以下のプロジェクトです。なお機関拠点型のプロジェクトに関しては12頁に掲載しています。

広領域連携型： 日本列島における地域社会変貌・災害からの地域文化の再構築

みんぱくユニット「日本列島における地域文化の再発見とその表象システムの構築」
代表者：日高真吾

日本列島は、南北に長く、海岸部から平野部、そして中山間部に居住地が広がり、それぞれの環境に適応させた多様な地域文化を育んできました。一方で、これらの地域文化は、グローバル化する社会変容のなかで、地域特有の文化が見えにくくなり、表面的には日本社会全体で画一化されたような印象を私たちに感じさせています。また、多発する大規模災害からの復興で、コミュニティの再編を余儀なくされた地域は、それまで受け継がれてきた地域文化を再構築せざるを得ない状況になることもしばしば見られる現状があります。そこで、本研究では、地域文化に着目し、さまざまな地域でどのような文化が継承され、新たな文化が構築されているのかの実情を明らかにします。また、これらの動向に人間文化研究がいかに貢献しうるのかを考察し、現在(いま)への社会貢献、未来への社会貢献を視野に入れた研究成果を目指すこととします。具体的には、「地域文化の再発見」、「地域文化の保存」、「地域文化の活用」という三つの視点から研究を展開しています。その上で、平常時において埋没している地域文化を再発見し、その文化をそこに住まう地域住民と外部社会の双方にとって有意義な形で表象するためのシステムを構築します。

広領域連携型： アジアにおける「エコヘルス」研究の新展開

みんぱくユニット「文明社会における食の布置」
代表者：野林厚志

本研究の目的は、食の概念とその体系的な実践とを、文明社会を支える文化装置としてとらえ、食の社会的機能や歴史動態を解明し、食をめぐる社会的共存や衝突の原理を探究することです。食は個体の生命を維持するための基本的な営みであると同時に、文化や経済と深く関わる行為としてとらえられてきました。一方で食糧資源の大量生産、大量廃棄、地球規模の人口増加と数億人にもおよぶ飢餓人口は、生態学的適応に乖離した現代社会の食の実態を物語っています。こうした現代社会の食に関わる諸問題を超越的な視点で連結させるとともに、異なる視点をもつ研究分野の協働として、人類史の視点からの文明の盛衰と食との関係、生態学的アプローチからの食の機能等を議論に組み込み、文明社会の中における食の健全なありかたを探究していくことも本研究の狙いです。なお、本研究プロジェクトは総合地球環境学研究所が中心となり推進する「アジアにおける「エコヘルス」の新展開」の一つのユニット研究として実施しています。「エコヘルス」は、医療や疾病研究の視点で捉えられてきた「健康」を、社会変容と環境変化が急速に進む近現代における、暮らしや生態環境、生業、食生活等との関わりから探究しようとする新たな研究の視座であります。

ネットワーク型：北東アジア地域研究 北東アジアにおける地域構造の変容：越境から考察する共生への道

中心拠点「自然環境と文化・文明の構造」
代表者：池谷和信

国立民族学博物館北東アジア地域研究拠点は、みんぱく館内の文化人類学・民族学およびその隣接分野の研究者、および連携機関である国立歴史民俗博物館の考古学の研究者を中心に構成され、北東アジアを対象に、人とモノの移動と交流、政治及び経済のシステムの導入と影響に着目して、先史時代から現代に至るまでの長期的な時間幅の中で、自然環境と文化、文明の構造と変容の解明を目指しています。ここでの北東アジア地域とは、国・地域で言えばロシアのシベリア及び極東地域、モンゴル、韓国、北朝鮮、中国、日本に広がる空間を対象としています。従来は国家の枠組みにおいて研究が行われてきましたが、これらの国・地域を横断的に捉える新たな試みであるといえます。なお本拠点は、北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター、東北大学東北アジア研究センター、富山大学極東地域研究センター、島根県立大学北東アジア地域研究センター、早稲田大学総合研究機構現代中国研究所の各拠点とともに、中心拠点として本プロジェクトを推進しています。

ネットワーク型：現代中東地域研究 地球規模の変動下における中東の人間と文化—多元的価値共創社会をめざして

中心拠点「[文化資源]個人空間の再世界化」
代表者：西尾哲夫

現代中東地域研究では、国立民族学博物館を中心拠点とし、その他国内の四拠点と共同で研究活動を進めています。端的に述べると現代中東地域研究とは、中東地域における「個」と社会(共同体)のあり方の現代的動態に基づき、グローバル化と地域をめぐる双方向の複眼的な分析ベクトルをもって、人類や人間文化という普遍的な価値を視野に入れた研究です。本拠点では、現代的諸問題を解決するための基盤形成のために中東地域における社会構築のプロセスを、文化知識の資源化プロセスに着目して研究しています。中東地域を基点として広がる空間においては、世界を形成・構想するうえで、生身の個人が経験する未知なる人・場・情報との遭遇が重要な役割を担っています。流動する諸個人が暫定的に構築してゆく場の継起・累積から社会を構想する方法を、文化知識の資源化という側面から検討することで、個人が織りなす世界の特質を解明することが可能となります。そこで(1)「個」から世界への視点による他者観と、(2)社会的心性としての世界観にかかるサブプロジェクトを連携させた活動を実施しています。

ネットワーク型：南アジア地域研究 グローバル化する南アジアの構造変動 —持続的・包摂的・平和的發展のための総合的地域研究

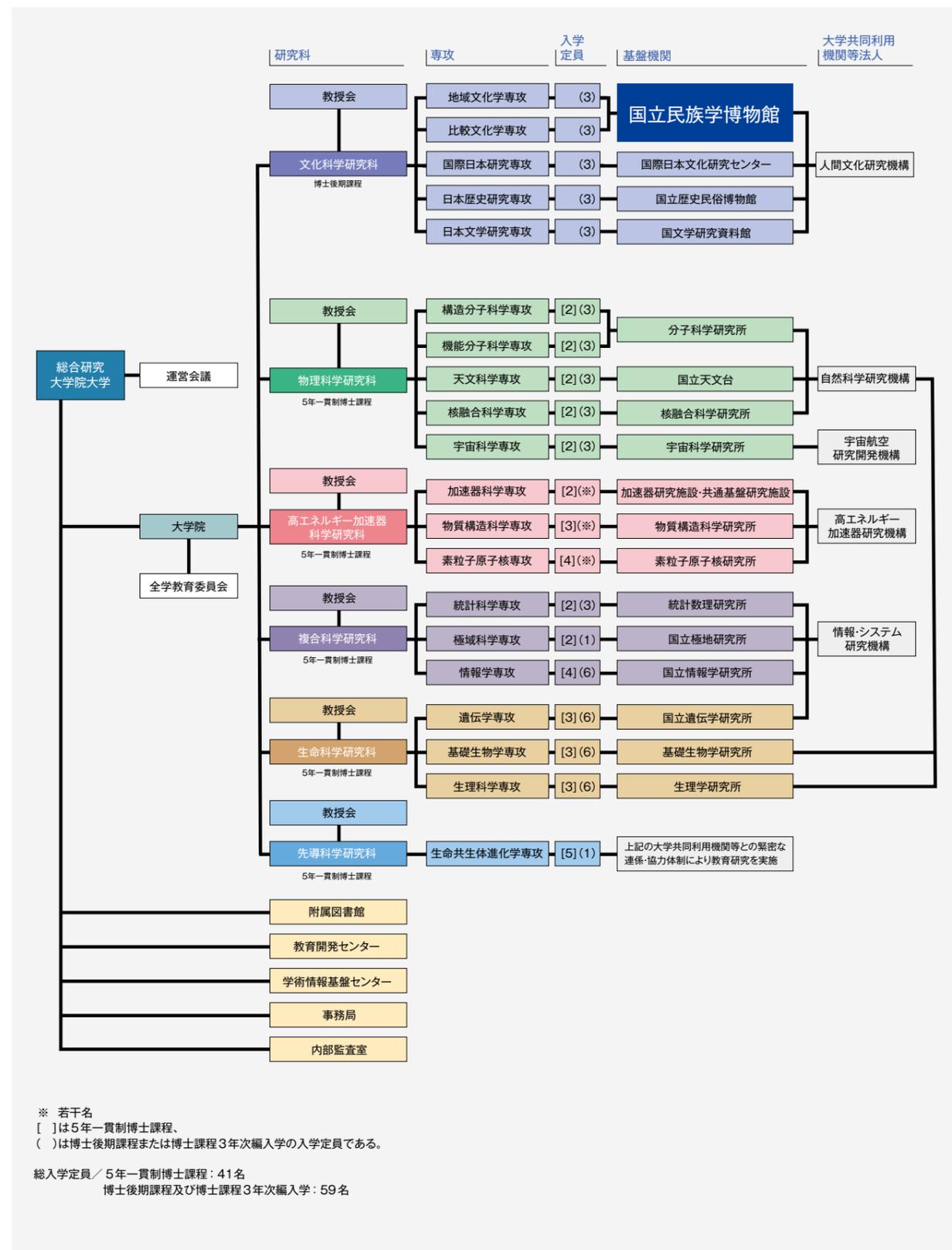
副中心拠点「南アジアの文化と社会」
代表者：三尾 稔

急速な経済発展とともに社会文化も大きく変わりつつある南アジア地域の現状は、わが国にとっても到底無視できるものではありません。本事業は、人文・社会諸科学を中心に自然科学分野とも協働して、地域的一体性の強い南アジア全体の総合的・俯瞰的な理解を深める研究プログラムを推進しています。このプロジェクトには、副中心拠点である国立民族学博物館をはじめ、京都大学(中心拠点)、東京大学、広島大学、東京外国語大学、龍谷大学の6拠点が参加し、ネットワーク型の共同研究事業を行っています。民族学博物館拠点では、南アジア発の人や文化・価値の環流状況の解明や社会変化の中でも維持される南アジア的な社会結合の特性の解明を通じ、地域固有の社会的レジリエンスの特徴を抽出し、グローバル化の中で生ずる社会的リスクへの対応という問題解決に貢献します。また、国際シンポジウムの開催、研究成果の英文叢書の刊行、国際学術協定の拡大、アジアにおける南アジア研究センターコンソーシアムの構築など、拠点事業全体の国際化の推進を担っています。



総合研究大学院大学は、学部をもたない大学院大学です。19の大学共同利用機関などとの緊密な連携・協力のもと、大学共同利用機関などの開かれた機能を生かし、各研究科・専攻間、国の内外の大学・大学院との相互交流を深めることにより、幅広い視野や総合性、豊かな国際性をもった高度な能力を有する研究者の養成を目的としています。

組織図



大学院教育

本館には、総合研究大学院大学の文化科学研究科(地域文化学専攻・比較文化学専攻)博士後期課程が設置されています。両専攻は、全国の研究者などの共同研究推進に寄与している大学共同利用機関などの人材と研究環境を基盤として、教育・研究をおこなっています。

地域文化学専攻・比較文化学専攻の目的

教育研究は、個々の教員による授業や研究指導と、複数の教員が指導する共通のゼミナールからなっています。共通のゼミナールには、主に1年次生を対象とする「基礎演習(通称「1年生ゼミナール」)」と、2年次生以上を対象に、論文作成の指導を中心とする「演習」(通称「論文ゼミナール」)があります。

また、主として1年次生を対象として、文化人類学・民族学にかかわる共通科目(特論)が開講されています。

これは、京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科、大阪大学大学院人間科学研究科、神戸大学大学院の国際文化科学研究科、人間発達環境学研究科の2研究科、京都文教大学大学院文化人類学研究科との、学生交流協定に基づく単位互換対象科目にもなっています。

学生はおおむね1年次においてフィールドワーク(現地調査)の準備をすすめ、2年次以降、指導教員の指導のもとに調査地でのフィールドワークをおこないます。そして調査終了後、指導教員による個別の指導や「論文ゼミナール」での指導を受けながら学位論文の完成をめざします。両専攻の教育研究目的は、次のとおりです。

- I. 文化人類学・民族学の独創的な研究
- II. 長期のフィールドワークでえられた資料にもとづく学位論文の作成
- III. 広い視野をもった、人間性豊かな研究者の養成

地域文化学専攻・比較文化学専攻の学生

大学院入学定員および現員

平成30年4月1日現在

専攻	入学定員	現員			計	備考
		1年次	2年次	3年次		
地域文化学専攻	3	6	3	7	16	
比較文化学専攻	3	1	1	13	15	
計	6	7	4	20	31人	

年度別学位記授与者数

年度	地域文化学専攻		比較文化学専攻		計
	課程博士	論文博士	課程博士	論文博士	
平成3年度			1		1
平成4年度					
平成5年度			1	1	2
平成6年度	2		1		3
平成7年度	2		1		3
平成8年度		3			3
平成9年度	3		4		7
平成10年度	4	2			6
平成11年度					
平成12年度	2		2	1	5
平成13年度	1	1	2	1	5
平成14年度	1	1		2	4
平成15年度					
平成16年度	2	3			5
平成17年度	4	2		2	8
平成18年度	2		3		5
平成19年度	2	1	3		6
平成20年度	1		1		2
平成21年度		1	1	1	3
平成22年度	2		2	3	7
平成23年度	3		1	1	5
平成24年度	1	1	1	1	4
平成25年度			1	1	2
平成26年度	2	1	2		5
平成27年度	3	1			4
平成28年度	1	1	1		3
平成29年度	1		1		2
計	39	18	29	14	100人

論文博士号取得希望者の受入

日本学術振興会が実施する「論文博士号取得希望者に対する支援事業」の支援を受ける者(論博研究者)が、大学院の受入研究科において研究指導にあたる教員の下、研究をおこないます。

利用案内

開館時間

開館時間 10:00～17:00 (入館は16:30まで)
 休館日 水曜日 (水曜日が祝日の場合は、翌日が休館)
 年末年始 (12月28日～1月4日)

観覧料

区分	個人	団体(20名以上)及び割引※
一般	420円	350円
高校・大学生	250円	200円
小・中学生	無料	

毎週土曜日は、高校生は無料で観覧できます。
 (ただし、自然文化園(有料区域)を通行する場合は入園料が必要です。)
 障がい者手帳をお持ちの方は、付添者1名とともに無料で観覧できます。
 日本文化人類学会会員及びICOM(国際博物館会議)会員・日本博物館協会会員の方は、
 無料で観覧できます。(要会員証)

※以下の方々は、割引料金で観覧できます。
 20名以上の団体、大学等*の授業でご利用の方、授業レポート等の作成を目的とする高校生、
 3ヶ月以内のリピーター、満65歳以上の方(要証明書等)
 ※大学等は、短大、大学、大学院、専修学校の専門課程
 ※なお、短大生・大学生・大学院生の方は、教員が同行し、授業で展示場を利用する場合は、
 事前にお申し込みいただくと、観覧料が無料になります。詳しくはお問い合わせください。
 (自然文化園各ゲートで本館の観覧券をお買い求めの場合は、本館窓口で差額を返却いたします。)

特別展はその都度別に定めます

お問い合わせ先 Tel.06-6876-2151(代) Fax.06-6875-0401

ホームページ <http://www.minpaku.ac.jp/>

案内・サービス

■国立民族学博物館友の会 お問い合わせ先: Tel.06-6877-8893(千里文化財団) 本館1階エントランスホール「友の会カウンター」
 「国立民族学博物館友の会」では、本館研究者の協力のもとに、『季刊民族学』を発行し、多様な文化に直接ふれる「研修の旅」や「体験セミナー」、各種講演会などを催しています。

■ミュージアム・ショップ (営業時間 10:00～17:00) お問い合わせ先: Tel.06-6876-3112
 世界各国の工芸品や文化人類学・民族学に関する書籍などを購入することができます。

■レストラン (営業時間 11:00～16:30 ラストオーダー16:00) お問い合わせ先: Tel.06-6876-1293
 本格エスニックメニューを提供しています。カフェのみのご利用も可能です。
 座席数は110席あり、少人数から団体まで予約いただけます。また、団体のお客様については弁当の予約も可能です。



友の会カウンター



ミュージアム・ショップ



友の会刊行物
「季刊民族学」



レストラン

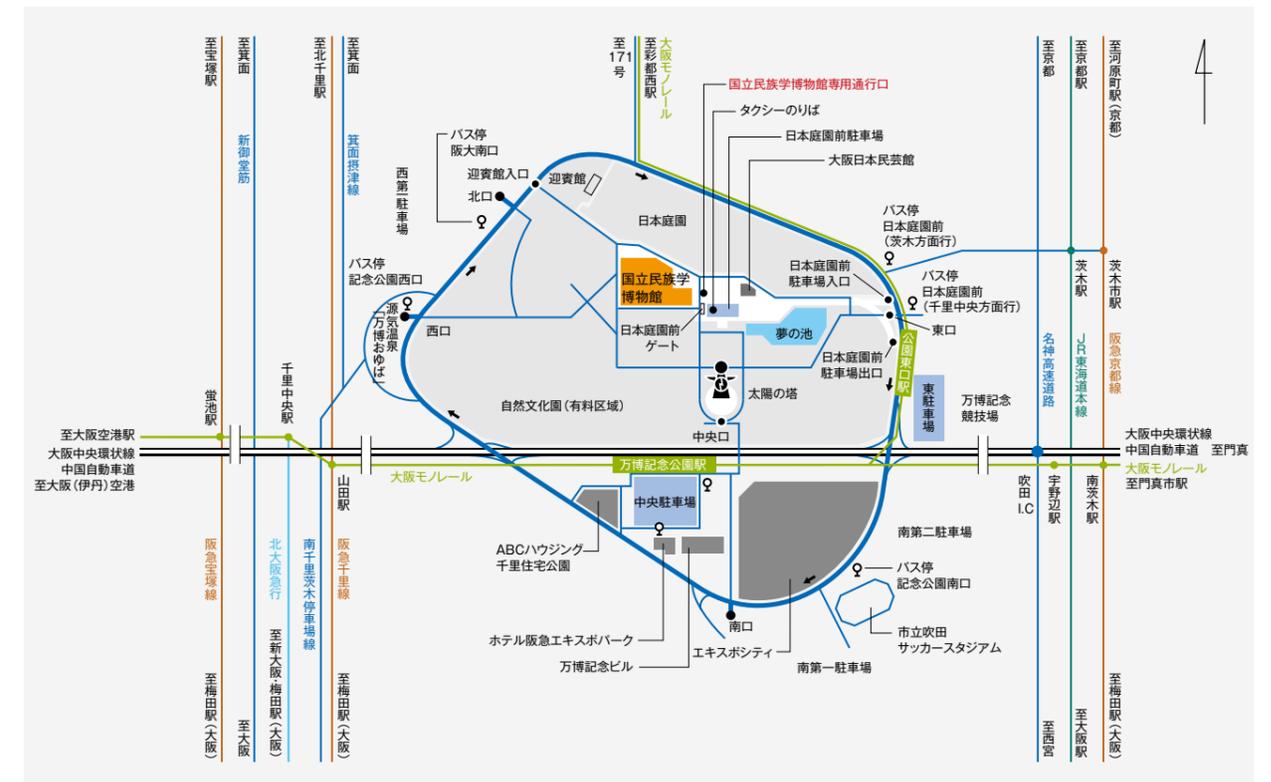


友の会主催「海外民族学研修の旅」

交通のご案内

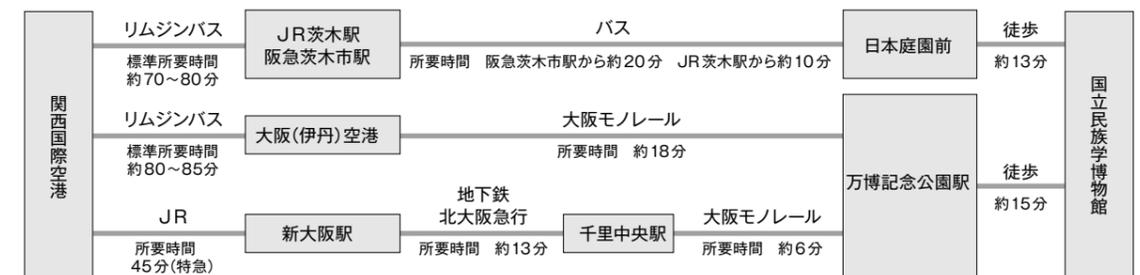
- 大阪・万博記念公園内
 - 大阪モノレール…「万博記念公園駅」または「公園東口駅」下車徒歩約15分
 - バス…阪急茨木市駅・JR茨木駅から「日本庭園前」下車徒歩約13分
 - 乗用車…万博記念公園「日本庭園前駐車場」(有料)から徒歩約5分
 - タクシー…万博記念公園「日本庭園前駐車場」まで乗り入れてきます。
- 「日本庭園前駐車場」を利用される方は、「日本庭園前ゲート」横にある当館専用通行口をお通りください。
 ※ 自然文化園(中央口、西口、北口)窓口で、当館の観覧券をお買い求めください。同園内を無料で通行できます。
 ※ 東口からは、自然文化園(有料区域)を通行せずに来館できます。
 ※ 東口または日本庭園前駐車場から来館し、自然文化園(有料区域)を通行してお帰りの場合は、同園入園料が必要です。

周辺図



主要ターミナルからのアクセス

当館までの交通手段はいくつかありますが、主要ターミナルからのアクセスには、次の方法が便利です。



要覧

2018

 国立民族学博物館

〒565-8511 大阪府吹田市千里万博公園10-1

